

磯の潮干

生人と然自

家も建つ可き平磐の今日は水を出で、日光に見へ、岩に附着せる海藻の日に照らされて、ぴち／＼と何か言ふ様なるもおかし。岩の裂け目には、退きわすれし潮水湛へて日に温み、名もなき小魚多く遊げり。岩より岩に飛びて、磯の盡端に行けば、此處は潭深ふして然も水は緑玉の色に澄み、かぢめ、もく、みるなどさま／＼の海藻波のうねるまゝに揺々と靡き、日光の金糸を落して水底に綾を織れるも美しく、ベラ、カサゴ、トラハゼ、カワハギなど磯魚の岩を出で藻に隠れて、往來するあれば、紅の海松、朱色のヒトデ、紫色のガゼ、緑色のイソキンチャク、茶色の雨虎など動植物の分界怪しきもの共の此處其處に水を彩どりて、水中の春は陸上の春よりも却つて美はし。

潮の香を嗅ぎて、岩の上より眺むれば、鹿菜、コブノリ、カマド、トコブシ、螺螄、イソモチ、タマ、ガゼ、ヨコガイ、シリダカなどを刈り剥ぎ拾ふ女點々として岩に散り、間々麗衣の子女とまじりて、磯も宛ながら花さける様なり。章魚突く男は、水澄ます油入れたる竹筒片手に、片手は手頃のホコをとつて、岩より岩に飛べば、見突きの舟は巧みに岩と岩の間を縫ふて、漁夫が

筆 雜 南 湘

視桶に顔さし入れ水底を覗きつゝ水手と言ふ聲ほのかに聞ふ。海は岩の彼方に帯よりも窄く、忽ち深碧天と際たち、忽ち白く光りて、空と一ならむとす。春帆二三、遠く伊豆の山を掠めて行く。

磐岩と地かたの間には、一泓の潮湛へて池をなし、山影緑を浸す。漁家の子女五六人、小さき帆舟を作りて之を浮かぶ。微風起りて帆張り、彼岸に達すれば、子供等手を拍つて喜ぶ。風止みて、舟中流に滞ふれば、子供等石を投じて之を追ふ。啞なる子の、年は少しまさりたるが、其中に立まぢりて、吾放ちたる舟の首尾よく彼岸に着きしを、他の子供の袖曳きて指し示しつゝ嬉々と笑へるも、あはれなり。(四月二日)

沙濱の潮干

自 然 と 人 生

金澤の牡丹見に行きて、歸るさ、野島に遊びて見るに、野島より夏島まで直徑半里ばかりの砂濱は、夥しき貝掘り人に満たされぬ。皆此あたりの農婦、蟹女にて、此砂濱は實に彼等が衣食の田なり。老婆より五六才の女兒まで、皆かぶり手拭、赤襪、跣足と云ふ出立ち右に裁庵丁の如きものを逆手にとりて砂を鋤き返へし、左手ははしこく掘りかへしたる貝を拾ひ行く。或は一尺あまりの竹箒の尖に鉄力の鋒つけたるを砂に穿てる小穴につきさして、馬刀貝を引き上ぐるもあり。獲物は鹽吹貝、蜆、尤も多く、蛤、螺、馬刀、ばか、など之につき、間々わたり蟹、車蝦などの砂にもぐれるあり。鹽吹貝は名の如く、掘りて取らんとすれば、忽ちふつと水吐くさま人を嘲りて唾きする様にて、面憎し。馬刀は穴を見て初一刺に刺さざれば、遁竄して行く處を知らず。蝦は退潮に逃げ後れて、砂にもぐり、窟強の隱家と思へるが、掘りかへされて阿容々々と捕虜になる、宛ながら平治の信西も思はれて笑止なり。

見渡せば、砂は恰も一大盤をなし、其の周圍には碧海宛から帶の如く盤を繞り、碧色の遠山また條の如く海を限る。盤上は薄紫の砂にして、處々の殘溜淺ふして踵をぬらさず。小蟹走り、小蟹

湘 南 雜 筆

遊び、何處にもふち／＼鳴る音す。蟹の言ふにや、沙の日と曬やくにや。靜かに見れば、此一大砂盤の上に、貝掘る人は蟻の散れるが如く、點々として俯き、俛し、屈みつゝ、蟹の如く砂を掘かへせば、紫の砂は簾々として黒く覆へり行く。或は歌ひ、或者は黙し、遠きは呼び、近きは語り、時々或者立ちて腰伸ばせば、其頭は砂盤を越へて、帶の如き海を越へて、白雲ゆく空につかへぬ。

長閑なる哉、海遠うして細く、帆いよく細く、山遠うして碧く、雲ありていよく碧し。數百の兒女老幼砂に群がりて、おのかじ、砂を掘りては貝をおさめ、いそ／＼としていそしめば、手桶と籠と器とは其處此處に散點し、山影は砂上の溜に臥し、すべて悠々として春光の中にあ

り。

已にして潮次第に満ちむとするにや、或はふごを荷ひ、或は熊手を肩にし、ざるを背負ひ、手桶を提げて、歸る者續々「まだお取りなさんすかい」など呼ぶもあれば、「あぶねエよ、潮が満ちて来るだ」など子供を戒むる聲も聞ふ。後れて來れるは、猶踏とまりて、汲々たり。

已にして潮は砂盤の四方より包圍攻撃を始め、帶の如くなりし海は四方より一分づゝ次第に廣まりて、初め砂盤の中央に掘り居し者も汐先に足をあらはれ、次第に一人づゝ陸へ陸へと驅りやら

れて、砂退り人退き潮進み海進みて、薄紫の盤は見るく縮まり、一時間ばかりして見れば、砂場痕なく、海は吾足下まで漫々と白く湛へ、帆影悠々として所得貌に浮めり。

(四月一日)

花月の夜

戸を明くれば、十六日の月櫻の梢にあり。空色淡くして碧霞み、白雲團々、月に近きは銀の如く光り、遠きは綿の如く和らかなり。春星影よりも微に空を綴る。微茫月色、花に映じて、密なる枝は月を鎖してほの闇く、疎なる一枝は月にさし出で、ほの白く、風情言ひ盡し難し。薄き影と、薄き光は、落花點々たる庭に落ちて、地を歩す、宛ながら天を歩むの感あり。濱の方を望めば、砂洲茫々として白し。何處やらに俚歌を唱ふ聲あり。

又

已にして雨はらくと降り來ぬ。やがてまた止みぬ。春雲月を籠めて、夜ほの白く、櫻花澹として無からむとす。蛙の聲いと静かなり。

(四月十五日)

新樹

夜來の膏雨止み、九時頃には満天の雲散り且薄れ且細りて、綿の如きもの紗となり、紗の如きもの煙となり、煙の如きもの終に全く消へ、一碧玉の如き空となりぬ。
日光雨の如く射し來りて、障子に若葉の影さしぬ。
其影の多きを見て、若葉の茂れるを知る。

生人と然自

静かに觀れば、一庭の新樹日を受けて日を透し、金綠色に榮へて、宛ながら一天の日光を庭中に集めたるの感あり。其の枝々葉々上には水の如き碧の空に映り、地にはおのゝ紫の影を落せるを見よ。

櫻は葉となりたれど、猶稀に一點二點の殘花を葉がくれにとどめ、時々蝶の飛ぶが如くひらくと舞い落つ。木の下は落花と紅萼と點々として影と共に地に貼せり。白き鶏一羽、身に斑々たる若葉の影を帯びつゝ、落花を啄む。

枝と枝との間に、かけ渡したる蛛糸の、碧に黃に、紅に閃めくを見よ。限りなき飛虫の雪の如く紛々として樹を繞り、蜂虻の呟々として日光に飛ぶを見よ。自然は此麗日に際して、十分の満足

を表し居るなり。

獨り蝴蝶の往く春を追ふて忙しげなる、夢と知らで花にあこがるゝかとあはれなり。
風徐ろに吹き來ぬ。新樹は徐ろに碧空を撫で、頷き、滿地の樹影また靜かに顫ひ、新樹より新樹にかけ渡したる洗濯物の影は翩々として地上に躍りつゝあり。
落木に近かりし隣家は新樹に遠くなりぬ。牆を隔て、機聲啞啞。

又

日落ちぬ。樺色の雲あり、高く新樹の梢にかゝりぬ。

夕風そよ吹きて、新樹空にそよぎ、麥圃も靜かに波うちつゝあり。蒼々として日、夕に向ふ。

顧れば後山の松の上に、十四日の月盆の如く、未だ光なくしてかゝれり。畑を歩すれば、豆葉豆花の香衣を襲ふ。

空も空氣も風も月もすべて水の如く淡く、水の如く清く、水の如く流る。

(四月廿日)

暮春の野

青葉茂りて、村々緑に埋れ、蘆暢びて川狭ふなりぬ。

川の上流に立ちて、村の彼方に沈む日を見る。日は已に小坪の山にかゝりて、山は青黒き村の梢に絶々の紫を見せたり。潮次第に満ちて、川逆まに流れ、一川の泡、雪の浮める如く、青蘆の影を掠めて溯り行く。彼方の岸に四つ手網あり。人は青蘆に隠れて見へねど、其四ツ手を引上ぐる毎に、網は夕日を帯びて紫金色に閃めき、玉の如き水たらりと川に滴る。

やがて日は紅の球を揺かして山に落ちぬ。残照林端の空を紅に抹し、水にも其色流れつ。潮はいよ／＼川に満ち、残照を浮べ、青蘆の影を載せ、白き泡を運び、紺色の林影を浸して、漫々としてまさに小板橋を浸さむとす。時々魚あり林影の中にはねて、紺青の水に白き渦紋を湧かしぬ。

夕風そよ吹き、残照の影も次第に薄ふなりぬ。蘆は影と一つになり、そよ／＼歌ひながら暮れ行く。何處の寺の鐘か杳々として野末を渡る。

やがて地は青黒く暮れ、人家の障子に燈火紅に見へ初めぬ。

(五月十日)

蒼々茫々の夕

静かなるは麥荳濟む頃の田舎の夕暮なりけり。

神武寺に遊び、夕に及びて獨り田間の路を辿りて歸る。日は蒼然たる暮雲に包まれて落ち、雲のきれ目に一抹朱をほかせし残照も消へぬ。此處其處の畑より、村より、山側より、麥荳焼く煙縷々として立上り、蓬々として廣がり、果ては山も村も茫々となりぬ。

静かに立ちて眺むれば、暮雲暮山の影落ちて水闇らき田の面に、白きもの湧き出で、見る／＼田より田に蔓延り行く。麥荳焼く煙の影の田を渡るなりけり。其底に蛙聲あり。

日落ち、煙満ち、物は物と互に融け、恍として無我の境に入る。人語なく、物音なく、燈影なし。唯蒼々たり、茫々たり。

静かなる夕や。

獨り黄昏の底に立ちて、耳傾くれば、蛙聲獨り閑々、また戀々。是れ實に「夕」の聲なり。

(六月七日)

夕山の百合

夕方後山に登る。夕風青茅を戦がして、百合の花の香其處はかたく漂ひ、丘上にしよんぼり月の影あり。日は大山の右に入りて、残暈猶明らかに、金禪色の横雲ありて、宛ながら彩旛の翻れる如く、西より北に横たふ。富士は薄き藍色の暮雲を抽ぎてほのかに其頂を露はし、海は紫を流して、一帆徐ろに其面を移り行く。

村の方を望めば、此頃まで村と村との間に照り渡りし麥は何時か刈られて、其あと黒く、田は半植へられて、緑ほのかなる新秧の田と、水のみ白き未挿の田と入り亂れ、一條の川帯の如く其中を洩りて白く光りぬ。麥刈られて、緑樹の村いよく闇らし。其處にも、此處にも、麥わら焼く煙立のぼる。ふちく音するは、稗の焼くるなり。煙の本に紅の火閃めくは、風ありて煽れるなり。見るく煙は村を包み、山を侵して、黄昏は其中より湧きぬ。蛙聲風にのりて聞ふ。

暮れて、山を下れば、徑を夾む青茅の一色に青黒きに、點々たる百合の花、朧夜の星の如く、ほの白う暮れ残りぬ。風そよよとして、夕山の香袂に満つ。

山の端に月光り初めぬ。

(六月十三日)

梅雨の頃

雨降りて止み、止みて又降る。鴉聲と蛙聲と交り雨晴を争ふ。

雨の絶間に出で、麥藁まぢりの深泥を踏みつゝ、村を過ぐれば、緑くらき家には人ありて梅子を落し、畑には甘藷を植ゆる女あり。

田は大方植へられぬ。嫩黄田々、秧猶疎にして水多く、蛙聲四に満つ、田より田に落つ水は、音も濁りて、ごぼくと鳴る。まさに梅雨の頃の水の聲なり。

川は膏の如き碧潮満々として、黄なる麥藁一束浮き沈みつゝ漂ひぬ。川邊の蘆稀に穂を抽ぎたり。其蘆を折り敷いて、鰻鮎を釣る子供あり。

氣重ふして濃やかなり。村より出づる煙の濕ふて立ちも上らず、靄となりて這へるを見よ。山の藍深く緑重ふして、滴水を落さば色融けて流れむずるさまを見よ。山に梟の聲あり。

雨はらくとまた降り出でぬ。

(六月十八日)

夏

梅雨晴れて、まさしく夏となりぬ。
障子開き、簾を下ろして坐すれば、簾外山青く、白衣の人往來す。
富士も夏衣を着けぬ。碧の衣すがくしく、頭には僅かに二三條の雪を冠れり。青疊敷く相摸灘の上を習々として渡り來る風の涼しきを聞かずや。

又

生人と然自
今日初めて鯛の聲を後山に聞きぬ。一聲さやかにして銀鈴を振れる如し。
白日山に入り、涼は夕と共に生ず。外に出づれば川に釣る人あり。談笑の聲あり。笛聲あり。花火を揚ぐる子供あり。
夏の季は始まりぬ。 (七月十日)

涼しき夕

日落ちぬ。石垣に腰かけ、足を垂れつゝ、釣る。前に残照流るゝ川あり。後に青蘆さやくと戦げり。

潮次第に満ち、川逆まに流れぬ。水澄みて水無きが如く、水底地よりも鮮やかなり。小さき鰻は藻より藻にのたうち、今年生れのカイヅは隊をなして水色の玉にも似たる水を遊げば、其影ちら／＼と底に印せり。石垣の穴より出で遊ぶダボ鯨は、蟹をあげて迫り來る辨慶蟹を避けて身をかはせば、小鰻は杭を抱きて這ひ登り、石垣に縋れる宿かりは身を投ぐる様にころ／＼と水底に墜ち行く。

筆 雜 南 淵
下流の方を望めば、下流却つて上流の如く、水は山影碧深く落つる邊より涼風と共に流れ來る。潮満ち盛れば、「夕陽明滅亂流中」、残照の影やよもすれば押流されむとし、小鮮群がりて水を攪すれば、水流れて其紋を消し、氈々たる川底の藻は水に梳られて、今にも流れ出でむとすれば、幾隊の魚苗もとどまりかねて流れ行く。

199
垂れたる足の爪先に水とどく頃は、残照消へ、潮も満ちて淀みぬ。鱒跳つてまた水に落つる音、

秋、今日立つ。
芙蓉咲き、法師蟬鳴く。赫々として日熱するも、秋思已に天地に入りぬ。

(八月八日)

立 秋

石を投ぐる様なり。

(七月廿日)

迎 火

今日は八月十三日、此邊は陽曆より一月おくれに年中行事をすれば、今日は盆の初なり。日落ちて、夕風夕潮と共に生じ、川口に泊れる和船の櫓の邊りに八日の月銀の如き缺壁を掛けぬ。

吾宿の老婆一束の藁を川邊に持ち出で、中に杉葉を入れ、まつちを摺りて火を點しぬれば、藁は炎々として燃へ立ちぬ。老婆鉢に入れし水を、手もてふり澆ぎ、茄子の賽の目に切りたるを火に投げかけ、合掌して

生 人 と 然 自

「お爺さんも、孫も、此火につて御出なさい……さあここ家に御はいりなさい」

と云へば、二年前に母を喪ひ父を失へる五歳の童も、小さき掌を合はして火を拜みぬ。

川邊には、其處此處に火燃ふ。其一つに行きて見れば、八十餘の老婆線香をとり、熟々と燃ふる火を眺めてありき。此老婆は昨年老夫を喪へる者なり。

各處の火はとろくと燃へて、やがて灰となりぬ。夕潮石垣を拍ちてたふく聲あり。言はねども月も空より此世を眺め貌なり。

死者知るなき乎。夕風の「否」と囁やく聲を聞かず耶。

(八月十三日)

舟を川に浮ぶ

舟を浮べて、御最期川を溯る。

日落ちて、残照水にあり。山には蟬の音、蝸の音猶流れぬ。

舟は暮色と共に次第に川を溯る。夕潮満々と湛へて、青蘆の洲も半水にあり。舟行く方は、山影

碧く水に臥し、時々鱗あり、高く跳ねて白き紋を畫く。

日暮れて、水白く、兩岸黒し。鈴虫、松虫、きりくす、水を挾みて鳴き、山の闇きには梟咽

を鳴らす。空に五位鷺の聲あり。

(八月廿日)

夏去り秋來る

女郎花咲き、柿の實ほのかに黄ばみ、甘藷次第に甘し。つくくはうしは晝に、松虫鈴虫は夜に、

共に秋を語る。粟、稻、蘆穂のさわくと云ふ音を聞け。

微雨はらく降りて止みぬ。是れ今年の夏の季を送るの聲なり。

(八月廿八日)

秋分

今日は秋分なり。
朝起外に出づれば、白露地に満つ。稻穂、粟穂、薄花、蘆花すべて露の中うらにあり。虫聲水の如く流る。

又

自 然 と 人 生
彼岸ひがんの中ちゆうじち日ひなれば、近在きんざいの老幼男女藤澤ろうようなんじよふささわに鎌倉かまくらに寺詣りてらまきして歸る者、織るが如し。川邊かわべには鰯はせを釣る者、多く並べり。
午後ごごの日悠々ひゆうくとして、碧潮川へきちゆうがわに満ち、行人路かうじんみちに満ち、日光空じつくわうそらに満ち、百舌鳥もつせの聲耳こゑみみに満ち、風なく氣清ききよふして、秋心あきこころに満つ。

又

日入りぬ。無花菓むくわくわの葉蔭薄はかげうすくら闇くらくなりて、芙蓉ふようの花も夕ゆふべと共に凋しぼまむとす。空そらに雁聲がんせいあり。
十五夜じうごやの雨あめに隠れし月つきは、今宵こよひ照り出いでぬ。庭にわの眞砂まきご何時いつしか霜しも置ける様やうに白しろらみ、樹影じゆえい黒く地に湧わきぬ。

庭にわの白萩月しろはぎつきに照りて、雪ゆきの如し。

(九月廿三日)

鰻釣り

(上)

自 然 と 人 生

「阿叔、釣に行らッしやらないの？」
 恰も日曜の、午餐を喫つて居る所へ、外面の簾を掲げて、近所の小娘が案内に來た。斯娘の爺々なるものは、東京者だが、久しく逗子に居て、手舟一艘もつて、時々沖釣に出る男だ。二つ返事で、からり箸を投げて、道具と魚籃と敷物を、小脇にかゝへて、前川へ下りて見ると、舟の用意は出來て、舟主——甲某と云つて置かう——は徐々纜を解いて居る。今一人單衣の上へ、巡査の古外套を被つた爺は、或茶居の主人で、是も好釣家の乙某だ。川口を出て、灣内を十二三町斜めに横切つて行くと、最早鰻場だ。此處らは纒五六尋しか立たないが、底が巖で、藻が生へて、其れで鰻の寄る場所の一となつて居る。此處な場所が、此近傍では數ふる程しかない。其處を外れると、一日釣つても恐らく目的の魚は一尾も獲られないのである。櫓柄を握つた甲某は頻りに山を見ては考へて居たが、頓て領いて錨を下ろした。漁師はす

瀬 南 雜 筆

べて山の谷間とか、木とか家とかを見當にして、漁場を覺へて居る。で若し何の邊で鰻が釣れるかと漁師に問へば、彼等は山上の松を指して「彼の、それ、大い松があるね。彼を左左（若くは右右）とつて御出なさい」など教ふるのである。鰻釣りの時候は、九、十、十一月が盛りと云つて宜い。今頃では、よく釣れる當歳のが先四五寸、尤も中にはまる鰻、め鰻の二才三才と上つて尺も其上もあるのがかゝる。併し鰻はあたりが軟で、殊に口の薄い脆いもので、手荒に引いたり糸が撓むたりすれば、直ぐ鰻がぎれて逃げるものだ。釣は鯉釣位のもの、餌は多く白子、または鰻其のものを細かく切つて、同餌に用ふることもある。時間は大抵朝夕、水は成る可く濁るのが宜いのは、何の魚も異はないのだ。一艘の小舟の三箇所に陣取つて、三人各々糸を下ろして見たが、未だ時間が早い故か、水が澄むだ故か、ベラなどの磯魚が二三尾釣れたのみで、鰻のあの字もかゝらない。甲某は水中眼鏡で、海底を覗いて「黒鯛が來た、黒鯛が來た」と忙しく鯉を刻むで湯煮た薩摩芋に摺り雑ぜ、之を餌にして糸を下ろして見たが、更にあたらない。黒鯛は實に意地のきたない魚で、小鰻、糸目、小蟹、牛肉、薩摩芋、乃至上方地方でよくする鮓と味噌と餛飩粉の練りませ、何によらず貪つてはかゝるものだが、今日は水澄むで、殊に碧玉其まゝの水を射透す日光の明らかなるが、彼等の眼

を鮮やかならしめたと見へて、水中眼鏡で覗くと、五六尾の背の黒い魚等が如何にも欲し氣に餌の周圍を繞りくして居るが、終にかゝらなかつた。欠伸が鱸の方に聞へて、甲某先づ鈴のついた針金を舷側に挿し、糸を引かけ（魚がひけば鈴が鳴る趣構だ）煙草を燻かし始めると、乙某も欠伸して、古びた革の煙草入を取出した。自分も背伸して、恍然と眼を閉ぢ、又眼を開いて海原を眺める。

最早三時過ぎでもあらふか、日は西に廻つて、海の上に白金の柱が横はつて來た。良い時候だ、陸の方から北風が冷やりく海面を撫で、舟底を敲く程の細波を立て居る。鱗形の雲が天心から東南の方にかけて宛ながら白銀の波を大空の碧にうたして居ると、海は其影を浮べて漾々と揺めいて居る。富士江の島足柄箱根眞鶴が岬から伊豆の天城山は、西日の光にはつきりと際立ち、左手の方を見ると近くて葉山遠くて三崎、三浦半島は縦に短く走つて、天城と三崎の中間には伊豆の大島がほのかに見へる。白帆が其處此處に五つ六つ。大島の方角に、ペン尖でうつつたの如く一の如く小さいのは、鯉を釣る舟であらふ。名島の方で峭突く舟の棹が時々針程に空を突いて閃めくと、つい一丁ばかり離れて長い竿で針魚を釣つて居る舟が見へる。それ竿を上げた、針魚が閃らりと光つて舟に跳び込む。何處何處から湧いて來たのか、笹の一片に黒蟻二つ載せた

様なものが見へる。舟だ。黒蟻と見たのは、水夫二人で切々と漕いで居るのだ。其黒い姿が、櫂を押す拍子に、交叉へてはXとなり、離れてHの字となつて、組むつほぐれつ次第に大きくなつて來る。

秋だ。秋だ。實に秋だ、つい背後の逗子の山々も、心からか少し鳶色になつた様だ。不動様の邊りに頻に百舌鳥の鳴くのが聞へる。葉山から逗子の停車場に通ふがた馬車の喇叭の音が聞へる。

獵銃が無いと見くびつたものか、つい四五間側へ鷗が一羽下りて、時々水に潜つては鯉を啣へて出て、「人間は不器用なものだ」とさも嘲り顔に、此方に向いて、胸をつき出して、ゆらく波に浮いて居る。

(下)

其様する中に、笹の一片と見へた舟は漸次に近く漕いで來て、吾々の舟から三四十間離れて、碇を下ろして釣り始めた。針魚を釣つて居た舟も一艘、其側に寄つて來た。吾々も碇を上げて、舟を其方角に移した。

「如何だね、爺さん、些とは鯨のかたがあるかい？」
 一艘の漁師は答へた「左様さね、纒二三尾誑しましたアよ」
 二三尾、さあ氣をつけろ、と争ふて糸を下ろして今や手ごたへがあるかと待つて居ると、二十間ばかり向ふの波の上を突然にびん／＼つゞけさまに飛んで行くものがある。
 「梭魚かね？」と某甲が尋ねると、

自 然 と 人 生

「なあに、車鰻ですよ、鱸に追はれたんだね」と答ふる言葉の下から、一艘の舟は手早く碇をぬいで、手早く櫓を押して、手早く竿を取り出して、頻に鱸を所謂だましにかゝつたが、思はしくないと思へて、また漕ぎ戻して、鯨釣りにかゝつた。
 釣瓶落しと云ふ秋の日は、箱根の駒が嶽の上に落ちかゝつて、富士の頭は早や紫に染つて来た。風は悉皆風いで、落日の影漾々と水の上に金を流して居る。百舌も鳴き已むで、陸の方に啞々と鳥の聲が聞え初めた。實に静かな秋の夕だ。空高く海渺々として風なく浪なく、夕日の光獨り此間に満ち満ちて居る。
 忽ち珂々！ 某甲が糸をかけて置いた針金の鈴が一つ鳴つたかと思ふと珂々琳々と二つ三つ四つつゞけさまに鳴つた。来たな！ 繰り上げる糸の末を見ると、果然鶯茶の背に、銀色の腹をした、

湘 南 雜 筆

眼の大きな、口の透き通つた五寸位のやつが、潑刺と上つて来た。と見る内に、自分の指先にかけた糸がびくりしめた。糸を手練ると、重い。大きいぞ。それ上つた。まる鯨だ。一尺はたつぷりあらふ。
 さあ釣れ出した。三艘の舟三の字に並んで、餌をつける、投込む、手練る。所謂膺挑まず、眼逃かず、枚を啣むと云ふ格で、早や蔭深くなり行く水の上のびかゝつて、繰り下ろし、引き上げる。隣の舟でドブンと鉛錘を投込む音、此方の舟で手練る糸の舷側に軋る音、釣り上げられた魚のばた／＼舟板の上にはねては生簀の水に潑込む音。
 「いや此奴ア大きい。ちよ、ちよ、一寸、其た、攔網を」と某甲が遽しく叫むだ。
 撈い上げて見ると、何だ、目張の大きいやつだ。
 「畜生め、到頭かゝりやがつたな」と乙某が胴の間で獨語するのを顧ると、黒鯛を釣り上げて居る。黒鯛先生、先刻までは餌を遶つて敢て茹はなかつたが、終に夕蔭になつて眼がくらむだと思へる。
 破れた沈黙はまたもとに復へつて、また暫く釣つて居ると、大方葉山の寺で撞き出したのであらふ、暮の鐘が一つポーンと海面に響いて来た。

「如何です、最早終いましやうかね」と甲某は空を仰いだ。

「左様ですな」と鑿き足らぬ溜息一つ。眼を上げると、何時の間にか、日は入つて、富士から相豆の連山は、入り日のあとの卵色の空に印度藍の波をうねらして、未だ瞭然と輪廓を見せて居るが、つい其處の葉山逗子の山々は已に夕靄がかゝつた。手を洗ふ潮水は宛ながら温湯だ。併し海氣は冷へて、乙某は古外套の襟を立てた。大島は最早見へない。鯉舟の歸るのであらふ、舟は見へぬが、「エツシヨ、く、く」臚拍子が遙に聞へる。

他の二艘も碇をあげて、一艘は小坪へ、一艘は新宿へ歸つて行く。吾々も道具を收めて、富士に見送られて、紫流す水を徐々に分けて行く。最早暮れた。海の上は未だ明るいが、行く方は、濱も松林も人家も夕炊の煙も山も茫とした一の色に融け合つて、唯臚々として居る。櫓聲の絶間を、三聲四聲高く雁が鳴いて通つた。

川口近くなつて、山の影に入ると、驚いた鱈が跳ねては、眞黒い水に白く環を書く。火光がちら／＼見へ出した。何處やらに犬の吠ゆるのが聞へる。川口の浅瀬の退潮に棹して、舟を乗り入ると、岸の上に白いものが立つて居て、

「爺々ですか」

と幼い聲で呼むだ。先刻案内に來た小娘である。彼女の母なるものも、立つて居る。

「提燈を持つて來な」と呼ながら甲某は舟を繋いで、提燈の光に、生簀の魚を襤網で撈つて、三の魚籃に移した。釣れる時間が短かつたのだが、夫れでも七八十はあらふ。皆潑刺として跳つて居る。

「左様なら。御疲れでしたらう」

道具と敷物と其れから重くなつた魚籃を提げて、ふり顧つて見ると、眞黒い鳴鶴が岬の右手に、今日釣つた海は未だほのかに一道の白を展べて、富士もぼいやりと見へる。富士の上には、明星が一つ、薄紫の空に見えいて居る。

(十月三日)

海と合戦

(一)

幸か、不幸か、未だ一度も銃を取つて、敵兵進撃の衝に當つたことはないが、今度初めて海と合戦をして見た。

自 然 と 人 生

軍物語をするには、先づ戦場の地形から説明せねばならぬ。相摸灘は正南に開いて、太平洋の水を吞吐して居る。逗子灣は灘の東北隅に在つて、西南に口を開いて相摸灘を吞吐して居る。田越川はまた南西に向つて逗子灣の水を吞吐して居る。此川口に川を挟むで人家が約二十軒ばかりもある。自分の僑居は東岸にあつて、家の前を、川に沿ふて三崎往還が走つて、往還から一段高く右に母屋あり、左に小竹藪があり、此間が前庭になり、藤棚があつて、それから五六間退つて、猶一段高く自分等の寓所が立つて居る。中言だが、此小竹藪は、決して取り除いてはならぬと、今の家主の祖父の時代から言ひ置いてあるそらだ。五日以來の雨に、田越川の水は浮き上る様に増して來た、船は大抵六日の暮方に、一艘も残らず、

湘 南 雜 筆

或は陸に引上げ、或は水上遠く逃げてしまつた。七日の朝、満潮の頃は、やゝもすると、水はちよろ／＼三崎往還に上つて、皇太子殿下沼津行啓の前には、土木掛が人夫を指揮して、頻りに此處其處杭をうつたり、砂利を填めたり、板を渡したりするのを見かけた。正午頃になつて、雨が少し止むと、それは蒸暑い、怪しい、胸惡な空氣が家を包んで、障子を明けると、蒸風呂の湯氣の様なやつがぼやり／＼顔に當つて、座右にある書棚の玻璃戸が見る／＼汗かいた。外に出て見ると、空も海も川もひた濁りに濁つて、今にも何か出て來さうである。近所の者も頻りに空を見て居る。忙々と戸締をする者もある。老龍庵 此は家嚴の隱栖で、半丁ばかり川上になつて、殊に小高くなつて居るので、水の心配はないのだ 走せつけて、戸の門を下ろしたり、心張棒をしたり、風の用意をして、偕歸つて居ると、頓て吹き出した。南風だ。雨も降り出した。僅かに開いた雨戸の隙から鐵砲玉とたばしる雨の障子に向つて、書を讀むで居ると、風浪風雨の聲屋を繞つて、宛として孤舟に座するの思がある。約二時頃でもあつたらふか、母屋の方から子供が三四人どろ／＼逃げて來て、前庭に罵り騒ぐ家主の聲が聞へる。突と起つて戸を開けて、はッーと思つた。海は吾沓脱石の下まで來て居る。庭一面の水の中に立つて、家主は娘と血眼になつて、防波の丸太を横へて居る。

「加勢が来たぞ」

一聲叫んで、尻引からけて、飛んで下りると、波は陸を残して颯と引いた。恐ろしい力だ。道路の石垣の上押へにした長三尺位の切石を宛ながら毬なんと玩ぶ様に、ころ／＼轉ばして行く。

「さあ、今だ！」

降る、吹く、其間を、自分はユーゴーの「渡海難」の主人公ギリアットが孤島の暴風雨の最中に防浪材を組立つる一節を思ひ浮かべながら、防波の製造にかゝつた。宛ながら弾丸の面に立つて胸壁を築くのである。左手の方は竹藪が屈強の堡壘となつて居る。虞る可きは此竹藪から母屋までの正面だ。有丈の杉丸太を運び束ねる。藤棚の大杭に結つける。伊豆石の三十貫目もあらりと云ふやつを家主と二人で轉がして、根じめにする。未だ手薄だ。不圖往還に算を亂して轉がつた切石を目につけて逸早く飛んで行く拍子に、

「來ますぜ、來ますぜ、旦那」

遽しく呼ぶ家主が聲を聞き／＼やつと轉がして來た切石を防材に立かけて、飛びのくより早く、後追かけて來た一道の頗る大きな波が、づづ／＼と川を逆押に押し、一簣り往還に來たかと思つると、出來かゝつた防材を「何の此しきに」と云はむばかりに跳り越へて、汎瀾と庭一面に散つ

た。のみならず、一派の浪は斜めに防材を掠めて、撞と一とつ母屋の雨戸に衝ると、雨戸を一枚向ふさまに押し倒して、其隙から滔々と流れ入つた。跣足になつて必死と道具を奥へ運で居た主婦の聲として「まあ如何せう？何もかも水になつちやつたよウ」

(一一)

左なきだに三日降り續いた雨に、川水は漫々として岸に及むで居る。加之此進潮、更に此暴風。風は海を驅り、海は風を挟み、一灣の水を一灣に、一灣の水を一川に、一川の水を擧げて河口の三二十家に迫るのであるから、堪られぬ。

恰も好し、山手に寄つた家の若い者が五六人、駈けつけて來た。屈強な手脚が浪の間々を潜つては、切石の石塔大なのを十四五も抱いて來て、丸太の上に並べ、猶其上を大丸太で押へて、荒繩で蜘蛛にからげた。母屋の雨戸は裏表から丸太を宛がつて、籬挟みに犇々と括つて、左もなき所は三間梯子を緊しく打付けてしまつた。正面の堡壘は粗造ながら先づ出來た。此上は唯勝敗を何れにか決するのみである。

潮垂衣紋りもあへず、藤棚の大柱を本營の牙旗と紐つて、堡壘の上に立つて見ると、實に凄まじ

い寄手の勢だ。

灰色の空は低く海の面に舞い下つて、吹き上ぐる潮煙か、雲か、霧か、分からぬ蓬々としたものが、連りに北へ北へと走つて居る。常に海路の末に見る富士を初め相豆の連山は何處へ行つたか、固より影も見へず。降りしきる雨、しぶく潮煙に、遙かの沖は茫とかき暮れて、空と海の堺も見へぬが、一里あまり彼方には猛りに猛つた泥海の時々空を目掛けて跳り上がるのがほの白く見へる。鳴鶴が岬の石垣に、破れよ碎けよとぶつかつては三丈ばかり高く水煙を飛ばすのが見へる。直ぐ其處の川口の形勢に到ては、殊に凄まじいのである。常には八朔の高潮にも高く水上に出づる砂洲は、草一本の末も見へぬ程深く水底に没して、川口の咽喉は平常に倍して濶くなつて居るが、三日來降り續いたため夥しく漲つて来た川水は出でむと欲して川口の進潮に支へられ、風を挟むで駈々上げて来る潮水は満々たる川水に支へられ、川口の石垣の間に壓搾せられて、互に衝き合ひ、押し合ひ、もつれ合ひ、渦まき、哮つて、十二分に怒を含んで居る。恰も此時に乗じて、魘々たる暴風一陣二陣空際から吹き落して来ると、海は巨靈の手に撮み上げられるかの如く逆立つて、殆んど横に半里もある程の眞暗い大濤が、白蠟を振り白泡を散らして、陸を指して眞一文字に寄せて来る。而して其波濤は、北に小坪の岬に碎け、南に鳴鶴が岬の石垣に碎け、正

面新宿の濱に柔らかに受け留められて、更に志を得ないが中に、唯一箇所襲ひ入る可き弱點を田越川の川口に見出すのである。こゝに侵入の口を見出して、鞆鞆と寄せて来る。川口の水は驚いて總立になる。其を其まゝ先鋒に、狹隘なる川口の一門を争ふて、一時にゴーと逆押しに押し上げるのである。平壤を突出する滿洲白馬隊の勢も未だ及ばない。實にウオトルルーの其日、鐵石と固まつた英兵の方陣を目掛けて驀地に乗込んで来る佛蘭西の裝鎧騎兵隊の勢まさに斯くの如くであつたらふ。であるから、其衝に當る兩岸は、石垣も築地垣も板垣も瓦落々々と片端から崩れて、其颯と引くに當ては、押崩した物を瞬く間に引攪つて行くのである。吾寓は、川口とはやゝ斜になつて、殊に左の一角を竹藪で受とめて居る上に、流石防浪の堡壘が粗造ながら功を奏して、幾分からちつくる濤の力を殺いで居るが、併し吾室の沓脱石の下は始終一面の水となつて、

母屋の土間はやゝもすれば水脛を没せんとする勢である。戰場も恐らく斯様であらふ。危険の中にも一種壯快な、勝負氣が盛に催して、家主の娘を始めとして、加勢半分見物半分に来て居る近所の女子共迄が、防浪の堡壘に突立つて、吹きつくる雨風潮煙を物ともせず、沖の方を眺めて居る。川口に山の様な波が寄せて来ると、「来たよ」、「今度のは大いよ」と口々に罵りながら猶立つて居る。最早其處へ来たと云ふ時分に、一同身輕に飛のい

て、連りに「追つて下さい、(波を追つて下さいと云ふのである。波が高いと、聲をあげて追ふのは、海村の風俗だ) 追つて下さい」と叫ぶ家主が、兩手を廣げて「ヤ、ヤアツ」と来る波を追ふと、加勢に來た男女、雨戸の隙から覗いて居る小供まで、手をあげて「ヤアツ」と追ふ。村のカニユートに叱られて、意地悪い波は防材を飛び越へ潜りぬけて其處ら一面泡だらけにして颯と引くと、皆高い處からひらく／＼飛んで下りて、引く波のあと追かけて、堡壘の上から波の行末を見送つて居る。宛ながら海と鬼子ツコをする様な者だ。上流の方でも、左右の岸から頻りに「ヤアツ」と関の聲を揚げて居る。波は此兩岸の石垣板垣入垣の間を、追はれながらに獅子奮進の勢を以て、眞一文字にかけ通つて、富士見橋を一揺揺つて、果ては二丁ばかり上流のさ某邸の石垣を苦もなく飛び越へて、其餘波は遙か上流に漲つて行く。

一しきり雨が止み、風が小止たかと思ふと、今度は西南に廻つて恐ろしく吹き出した。吹きちぎらるる青葉木の葉はうなりをうつて亂れ飛ぶ。波は逆立つ。立つ波頭を其まゝ風は引擧つて、一面の白煙を吹き散らす。海は空と、風は潮と、まるで一になつて、浩々として殆んど物の音も聞へぬ。つゞけざまに打寄する大波小波に、往還の上は大人の股を没し、庭の上は殆んど脛を没するばかりになつて來た。役目とは云ひながら、此荒の最中を郵便物かついで驅けて來た脚夫も、

溜まらず飛び込んで來る。富士見橋の爪の土臺脆くも崩れて、向洲との通路は全く絶へ果てた。戦は今絶頂に達したのである。

立木に身を寄せて、辛ふじて川口の方を見ると、箱根の連山がつい川口に來たかと思ふ程の、正眞山の如き大波が打重ね／＼寄せて來る。吾南隣は竹藪に遮られて更に見へぬが、向ふの洲頭に立つて居るお某氏の別荘は夙に正面の築土垣を壊されて、家は著しく前の方へ屈んで居る。横手の垣と松が二三本残つて居たが、例の山の如き波が一つ、續いて二つ、ひらり／＼飛びかゝつて、松は頻りに頷くと見る間に、殊に大きな波が勢込んで松の梢を飛び越して、瀧落しに來ると、最早跡は何も無い。唯家が前に俯いて、更に大波の來て櫻ふのを待つのみである。此につゞいた養神亭の南の角の石垣も波の來る毎に、幼稚の玩そぶ積木なんぞ崩す様にぼろ／＼壊れ落ちて、其上に立つた垣も唯一簣りで意氣地なくばた／＼倒れて了ふ。表座敷に波を見て居た客の荷物を提げて、とつかは裏へ逃げ込むのが見へる。宛ながら鷺津丸根の落城を見る心地だ。

あまり人間の蠶食が劇しいから、海も今は猛然と怒つて、其千金の費百日の勞を唯一舉に破壊して居るのであらふ。何處の家からさらつたものか、青々した松の木、戸板、樽、桶、板ぎれ、木ぎれ、あらゆるものが浮きぬ沈みぬ濁浪の中にもがいて居ると、海は奪ひ取つた敵のものを其ま

に破城槌として、石垣板塀所嫌はず砕けよと打つける、長い手鍵を蜻蛉切と打ふつて、邪魔なす物を突放し引上げて居た村の平八も、波の勢のあまり烈しいので、終に逃げ込む。海は恣まゝに其復讐を逞しうして居る。
 忽焉正面から来た波が引かけるかと思ふと、後に聲あつて

「やあ、裏からも水が来たぞ」

物置小屋と本屋の間から泡だらけの水が滔々と押流して来た。隣家の椽の下を打ぬいて、餘れる勢竹藪を一匝して、逆まに流れて来たのである。所謂腹背に敵だ。時計を見ると未だ三時半、満潮と云ふ六時半までには、猶三時間もある。

此時こそは、自分も鳥濤がましいが、馬を樹下に立て潮の如く寄する佛軍の精銳を遙かに望みつゝ、時計を出し見て「ブルーヘルか、夜か」と獨語した英將の心になつたのである。

(三)

卒然雨が止む、風が少し小止れる、と思ふと伊豆の方の空がぼうつと明るくなつて、黄色い空に山の影がほのかにあらはれた。

「おゝ、向ふ山が見へて来たぞ」
 老幼男女一齊に関の聲を揚げた。斯一聲を聞いた時の心こそ、實にエリントンが佛軍の横合からうつてかゝつた李軍の第一發の砲聲を聞いた時の心であつた。

戦ひは最早絶頂を越した。曩きの一吹、一浸が、敵の精根の限りであつたのだ。敵の旗色は確かに動いて居る。風は猶吹く。併し折々息が途絶へる。波は猶高い、前よりも猶高くはないかと思はれる。併し其内に何處となく強弩の末の氣味がある。此隙に、裏の竹籬の破れを潜つて、老龍庵に走せつけて見ると、豫想に違はず、松の小枝が折れて、草花の俯伏になつた位で、往還は大分崩れて居るが、屋敷其ものは一石も崩れず、屹として立つて居る。

四時過ぐると、風力愈々衰へて来た。雲は北へ北へと暮引く様に捲き去つて、南の方は青空も見へ、頭に綿帽子を被いでは居るが、富士の姿も、相豆の連山も瞭然と見へて来た。後の山に突然に法師蟬が鳴き出した。家主は「最早此方のものだ」と云ひ貌に、まだ勢猛に寄せて来る大波小波に足を洗はせながら、丸太に腰かけて、煙草を吸つて居ると、此方には加勢の男が握飯を食いながら宿の娘と立話をして居る。

激戦已むと忽ち夥しく空腹を覺へたので、取りあへず、ずぶ濡れの着物を更へ、湯漬をかき込

んで、南隣^{なんりん}北隣^{ほくりん}は場所^{ばしょ}と手當^{てあて}と共によかつたので、皆^{みな}無事^{むじ}だ[〓]を見舞^{みま}ふと、實^{じつ}に眼^めも當^あてられぬ。て某^{なにかし}の別莊^{べつしょう}は、石垣^{いしがき}も板垣^{いたがき}も奇麗^{きれい}にとれて、松^{まつ}の木^きが根^ねこぎになつて、椽^{えん}の下^{した}に頭^{かしら}をつき込むで居ると、此方^{こつち}の車屋^{くるまや}の便所^{べんじょ}はピザの塔^{たふ}よりも傾^{かたじ}いて、井戸^{いど}が潰^{つぶ}れて、波^{なみ}はどんく床^{ゆか}の下^{した}を打^{うち}抜^ぬいて勝手^{かたて}次第^{しだい}に往來^{わうらい}して居る。某^{なにかし}の南隣^{なんりん}の某^{なにかし}の家^{いえ}は、南^{みなみ}の方^{かた}の屋根^{やね}を悉^{すつかり}皆^{みな}風^{かぜ}にとられ、臺所^{たいどころ}を奇麗^{きれい}に波^{なみ}にとられて、半死^{はんし}半生^{はんせい}の體^{てい}で立つて居ると、其前^{そのまへ}には往還^{わうくわん}の電信柱^{でんしんばしら}が、倒^{たふ}れて、電線^{でんせん}がぶらく下^さつたまふ、頻^{しき}りに波^{なみ}に引摺^{ひき}られて居る。風^{かぜ}は止^やむだ。併^{しか}し海^{うみ}は猶^{なほ}怒^{いか}つて、今は殆^{ほとん}ど滿潮^{まんしゅう}の勢^{いきほひ}未^あだ當^{あた}る可^べからざるものがあつて、鞆^{どう}と來^くる毎^{ごと}に此處^{こゝ}等^らの家^{いえ}の周圍^{まわり}は一面^{めん}の海^{うみ}になる。別莊^{べつしょう}から浪^{なみ}に追^おい出^だされて、紫^{むらさき}の袷^{あはせ}を着^きたて某^{なにかし}の少^{ちいさ}い嬢^{じやう}様^{さま}が下男^{げなん}の背^{せな}につかまりながら、遠方^{えんぱう}から此慘^{このさんたん}憐^{れん}たる光景^{ありさま}を見て居る。

立つて見て居る中に、日^ひが暮^くれた、と思^{おも}ふ間^まもなく、また晝^{ひる}に逆戻^{さやくもど}りした様に、赫^{くわつ}と明^あるくなつた。夥^{おびた}しい夕燒^{ゆやけ}だ。所謂^{いはゆる}「戰餘^{せんよ}落日^{らくじつ}黃^{わう}」とは此事^{このこと}であらふ、滿天^{まんてん}滿地^{まんぢ}眞黃^{まつきい}色^{いろ}に燒^やけて來^きた。獨^{ひとり}り海^{うみ}のみ紫瀾^{しらん}洶湧^{きゆうゆう}、鞆^{どう}として荒^あれ騒^{さわ}いで居る。夕燒^{ゆやけ}の空^{そら}に際立^{きざ}つ水餘^{すいよ}の破屋^{はやく}の眞黒^{まっくろ}いのを前^{まへ}にし、今引^{いまひ}いて行^いつた波^{なみ}の殘溜^{ざんりゅう}の黃^きなるを踏^ふんで、此景^{このけい}に對^{たい}した余^よは、一種^{しゆい}鬼氣^きの森然^{しんぜん}として身^みにしむを覺^{おぼ}へたのであつた。

夜^よに入^いると、風^{かぜ}いよく止^やむで、「木枯^こらしの果^ははありけり海^{うみ}の音^ね」、餘怒^{よど}を帶^おぶる海^{うみ}の音^ね獨^{ひとり}り鞆^{どう}として星光^{ほしかり}に鳴^なりどよむで居る。戰^{いくさ}は最早^{もう}終^はつた。海^{うみ}は終^{つい}に敗^{やぶ}れて退^{しりぞ}いたのである。併^{しか}し家々^{かか}未^いだ戸前^{こぜん}の堡障^{ほしやう}を徹^{てつ}せず、尙警^{なほけい}戒^{かい}を解^とかず、富士見橋^{ふじみはし}の袂^{たもと}には、篝火^{かぶりび}が夜^よ一夜^{いちや}燃^もへて居^ゐた。

(四)

翌^{よく}八日^{やち}の朝^{あさ}、早^{はや}く起^おきて見^みると、人^{ひと}を馬鹿^{ばか}にした様^{やう}な上^{じやう}天^{てん}氣^きだ。昨日^{きのう}の戰^{せん}場^{ばう}を見舞^{みま}ふと、實^{じつ}にひどい。自分^{じぶん}も隨分^{ずいぶん}激戰^{げきせん}をした積^{つもり}であつたが、餘所^{よそ}に比^{くら}べるとまだ樂^{らく}であつたと見^みへる。

吾僑^{わがきやう}居^ゐの前^{まへ}から一丁^{いちやう}あまりの間^{あひだ}は、道路^{だうろ}は消滅^{せうめつ}して、昔^{むかし}の濱^{はま}になつて居^ゐる。彼處^{あつち}の別莊^{べつしょう}は礎石^{そだい}を浪^{なみ}にとられて床下^{ゆかした}の砂^{すな}を抉^{えぐ}られて、べたりと前^{まへ}へのめつて居^ゐ、此方^{こち}の貸家^{かしや}は半分^{はんぶん}空^{くう}に乘^のり出^だして、今^{いま}も顛覆^{てんぷく}しそらだ。大木^{たいぼく}の根^ねが章魚^{たこ}の足^{あし}の如^{ごと}くに長々^{ながく}と洗^{あら}い出^だされて居^ゐると、道^{みち}の切石^{きりいし}は遠^{とほ}く畑^{はた}の中^{なか}にころむで居^ゐる。鳴鶴^{なきつる}が岬^{さき}の下^{した}の新築地^{しんつきぢ}の石垣^{いしがき}は、五六十間^{ごじゅうけん}が程^{ほど}めちやくくに崩^{くづ}れ石原^{いしはら}になつてしまつた。川口^{かわぐち}は無暗^{むやみ}に淺^あくなつて、洲^すが一夜^{いちや}に場所^{ばしょ}を變^かへて居^ゐる。

更^{さら}に葉山^{はやま}の方^{かた}に行^いつて見^みると、道^{みち}の眞中^{まんなか}には引揚^{ひきあ}げられた舟^{ふね}がづらり行手^{ゆくて}を塞^{ふさ}いで、此方^{こち}では大勢^{おほせ}かゝつて、傾^{かたじ}いた家^{いえ}をこね起^{おこ}して居^ゐると、彼方^{あち}では物置^{もの置き}が倒^{たふ}れて半腐^{はんぷ}した萱^{かや}の狼藉^{ろうぜき}としたのを

掻き退け、また彼方では家を素裸にして頭から行水を遣はして居る。別荘の崖崩れて、家の半ば空に浮むで居るのも見へる。蒲鉾屋の俎板大の切石の砂に埋れて居るのを掘り出して數へて居る石工もある。生簀の籠を流して、二十兩損したと血眼になつて舟を出す爺もある。何處の家では、四斗俵がころ／＼波に轉ばされて、誰の家は海から一丁もあるのに、ぐるりと波に打まわされて、誰は道具を悉皆濡らして、誰は何したと云ふ。何處を向いても、其話ばかりで、人の顔を見ては、

「大きい暴風雨でムいましたよ、マア」と云はぬ者はない。
家主の話では、十四年ぶりの荒ださうだ。

秋漸く深し

野路行けば、粟の收納の盛りにて、稻の收納もぼつ／＼始まりぬ。
蕎麥雪の如く、甘藷の畑は彌繁りに繁れり。百舌鳴く村に、紅なる黄なる星の如く柿の實の照れるを見よ。

彼岸花、螢草、野菊、蓼、小さき粟の如き稻の如き黍の如き烏麥の如き八千草に鳴く虫の音を踏み分け行けば、蛙飛び、蠱斯飛び、稀には蟹がさ／＼と隠れ行く。

又

山路行けば、薄荊萱の吾衣にかゝれるも、あはれなり。
山も秋や／＼深ふなりぬ。何の樹殊に色づき、何の葉殊に落ち始めしと云ふにあらねど、林漸く疎に、山骨やミ寒く、葉聲次第に乾き、樹々日々透明ならむとするを覺ふ。默然として歩めば、小鳥の石を落せしか、栗の實の自からはちけて落ちしか、ころ／＼がさと一聲木の間に物の落つる音して、あとはこつきり静かになりぬ。
(十月十一日)

富士雪を帯ぶ

富士雪を帯ぶ。さやかに雪を帯ぶ。
 秋空何ぞ高き。風威を帯ぶ相摸灘の怒號何ぞ壯なる。此空と此海の間に玲瓏として立つ富士の秀色を見ずや。

自 然 と 人 生

絶頂より五合目のあたりまで、銀よりも白き雪は桔梗色の山膚を被ひて、上は隈なく下は宛ながら笹縁とれる様に山を包む。雪色淨ふして點塵なく、日光に輝やき、水よりも澄める晩秋の空に襯し、豆相の連山を踏み、萬波雪の如く立ち騒ぐ相摸灘を俯瞰して、秀麗皎潔、神威十倍するを覺ふ。

嶽頂一點の雪、實に富士の秀色神采を十倍せしむるのみならず、更に四圍の大景に眼睛を點ず。東海の景は富士によりて生き、富士は雪によりて生く。

(十月十六日)

風

今日の風こそ、風の初なれ。

空を見るに一點の雲なく、天心より地平線に到るまで青々として水の如く、日色晶々として到らぬ隈なし。而して風は何處よりともなく、彌吹きに吹き來りて、海を荒らし、山を騒かし、木の葉を掃ひて已まず。空色、木葉の響、すべて一種乾ける枯れたる氣味ありて、秋の深きを思はしむ。

又

日は風に吹き落されぬ。眼を上ぐれば、十二日の月何時か後山の上に出でたり。洞然として未だ光なし。風の烈しきに月の光も吹き消されむざる心地せらる。

七時頃外に出で見れば、月は晝の如く風の上に牙へたり。地は白々と霜を敷きぬ。樹影深黒に亂るゝ道を踏みて、川口の方に行くに、前洲のあたり雪蛇の斜めに走るを見る。月影に白浪の寄するなり。

十時頃に到るも風は猶止まず。海の音、戸障子のはためき、樹梢のうなり、其間には蛙の聲も混

りて、屋を繞る。戸を開けば滿天滿地の月色。

(十月十七日)

風の後

風は忘れたる様に止みぬ。先の程まで騒々しく頭を掉りたりし庭前の櫻樹も畫ける如く静まりて、枝より枝にひき渡したる蜘蛛の糸の一微顫だに見る能はず。風の吹き集めたる落葉は其處に一堆、此處に一積、靜かに伏して、がさとも云はず。

庭に立ちて、空を望むに、地平線より天心に到るまで一點の雲なく、晶瑩玲瓏、明鏡よりも澄み、碧玉よりも匂やかに、深淵よりも光を含み、名工の鍛へる秋水よりも牙へたり。高く深く澄明にして、直ちに上帝の聖座をも見る可き心地す。

今日こそ眞に秋晩の尤も全き日の一なれ。二日に亘りし大雨の後、二日に亘りし風あり。彼雨もて洗ひ、此風もて掃ひ、而して天地は乾々淨々、空はいよ／＼高く、空氣はいよ／＼澄み、日はいよ／＼明らかに、瑩々として宇宙は一の璧となりぬ。自然は此上に完き秋日を與ふる能はず。

(十月十八日)

月を帯ぶ白菊

墨の如き樹影を浴びて、獨り中庭の夜に立てば、月を帯ぶる白菊ほのかに香りて、花の月と隣や
く聲も聞く可き心地す。俯きて、其一枝を折らんとするに、しとど露にぬれたり。折れば、月影
ほろ／＼とこぼれぬ。

朝來の雨止み、風息み、月夜の静味言盡し難し。何に動かされてか、井戸側の無花果の葉のがさ
りと云ひしあとは、一庭寂然として月と影と共に眠りぬ。
唯、稀に、稀に、檐滴の蔭闇き方に私語するのみ。

(十一月十二日)

暮秋

柿の落葉を踏みて、後山に登る。

黄茅蕭々として亂れ、龍膽の碧、棘實の紅と徑を綴る。

山上より見れば、田は盡く刈られ、麥の綠猶ほのかにして、村も瘠せ、晩秋の野いたく寂び
ぬ。

鳥五六羽あり、山上の樹より立ち、鳴き連れて彼方の村に向ふ。啞々の聲滿山に響く。

(十一月十五日)

透明凜然

碧空點翳なく、透明にして且凜然たり。天に向つて石を投ぜば、憂然として天鳴らむかと思ふ。
 風止みて、揺動せる空氣は瑩然と凝りぬ。此頃の空氣は金質あり。物響を傳ふるにも春の如く音
 波の悠々と廣まり行くにあらで、宛ながら三尖の飛矢空氣を射ぬけば、空氣は憂然と其響を傳へ、
 一瞬にして止むものゝ如し。
 (十一月二十日)

秋晩の佳日

今日は美日なり。

朝早く起きて、井戸端に顔を洗ふ。空はほのかに紫立ちたれど、山際は猶ほの闇し。鶏は小屋
 の闇きに鳴き、雀は已に樹梢に囀る。曉の風冷やかに面を拂ふ。

川邊に出づれば、潮いたく乾て且淺く、其上に浮べる船も猶夢見顔なり。何處の家も猶戸を閉し
 ぬ。砂の溜にちら／＼流るゝ残月の影を踏みて、川口近く立ちつゝ富士の朝日を見る。

富士は猶薄き藍色して立てり。相摸灘も一點の光なし。西空一抹微紅の光の外には、見る所凄と
 して寒色を帯びざるはなし。鳴鶴の岬より馬士が荷車に腰かけて馬蹄の憂々に節あはしつゝ俚歌

を歌ひ來る聲、氷を碎くが如く朝の空氣を震はしつ。
 良ありて西空の紅霞は下り下り下りて、已に富士の背後八九合の處に到れど、未だ峰頭一點の紅

なし。怪しみて見つゝある程に、峰頭白雪の一指もてなすりたる様に薄き濁れる朱色を帯び來
 りぬ。眼も離さず見れば、一秒一秒雪上の斑點は次第に廣く、次第に澄み、次第に明らかに、果

てはばつちりと薄紅に光り出でつ。雪は朝日の投げたる紅を吸ふて見る／＼四面に浸み渡り、富

士は終に紅に曙けぬ。鳴鶴の岬より鳶一羽すうと富士の半腹を掠めて、やがてはたくと羽搏つては駛せ、また駛せては二つ三つ羽搏つてすうと駛せ行く。

猶立ちてあれば、紅は已に相豆の連山に及び、顧みれば北の方も小坪の山に沿ふて空は全く薄紅になり、川水も臙脂を融き流したる様になりぬ。灘上に點々たる帆影も、近きは猶灰色に寒けれど、遠きは渾て金色をなしたり。

又

夕方また今朝富士を見し川邊の砂に立つて、夕日を見る。日はまさに鳴鶴の右に落ちむとして、白光爛々として眼見るに堪えず。鳴鶴は夕日に負いて聞く、石垣も黒し。其石垣の根に、一艘の船あり。櫓の中程に捲たる帆を懸けたるが黒々と日に劃せられ、櫓頭より三二條斜めに垂れたる帆綱は、日を受くる側に於て金色をなせり。

水乾て砂汀廣し。農夫あり、きら／＼と落日の影流るゝ水に立ちて、肥桶を洗ふ。前の砂洲に貝を拾ふ小供の影もまた黒く水に映りぬ。

眼を放てば、富士も、相豆の山もすべて茫としたる紫色になりぬ。やがて日は双肩を揺りて次第に落ち、初めは白金色の光を輪の四周にぼかせしも、落つるに従つて、次第に光を収めて金色の

空に眼以て見る可き團々たる黄球となり、一秒々々沈み行く。日の沈むに従つて山の紫も漸々濃くなりぬ。

やがて日は伊豆の山にかゝり、次第に沈みて次第に缺け、果ては金の櫛となり、點となりて、終に入りぬ。今迄赫々として夕陽に榮へたりし家々の西南面は、忽ち冷やかに蒼ざめて、乾坤の間生命なるものゝ今しも過ぎ終りたる心地す。光は實に生命なる哉。

されど猶日の入りしあとに餘光あり、相豆の山々濃き紫となり、また藍となりぬ。日の入りたるあとの空は金より朱となり、更に焦れ燻りたる黄色となり、餘の空も淺黄より縹となり、紫となり、宵の明星一つ夕日の跡に生れ出でぬ。

残曠天にあり、天水にあり。此美しき夕に立ちて、見れど飽かぬ自然の日々新なるを感ず。

(十一月廿四日)

時雨の日

今日は時雨の日なり。

はらく降り出づるかと思へば、止み、止しと思へば、また思ひ出でたる様に降り出づ。宿の女等幾たびか乾物の出し入れに迷ふ。自然も冬に入らむとして、心騒がしきにやあらむ。「忙しう世の思はるゝ時雨哉」と、古人の句妙なる哉。

日は薄絹につままれたる様に光薄く、山茫と打けぶり、落葉勝なる木々は打しめり、空気はうつとりとして重し。恰も春陰に似たり。たゞ寂しきのみ。

(十一月廿七日)

寒星

寒星一天、深黒なる屋根の上、深黒なる山の上、到る所として星ならざるはなし。葉落ちたる櫛の梢、大なる箒の如く空を摩して、枝々星を帯びたり。静かに中庭に立てば、山頂のあたり波濤の如く夜あらしの過ぐるを聞く。殷々として遠雷の如きは、隣家夜叙を磨るなり。

(十二月五日)

寒月

夜九時、戸を開けば、寒月晝の如し。風は葉もなき萬樹をふるひて、飄々、颯々、霜を含める空
明に揺動し、地上の影木と共に揺動す。其處此處に落ち散る木の葉、月光に閃めいて、簞、々、
々、玉屑を踏む思あり。

自 然 と 人 生

仰ぎ見れば、高空雲なく、寒光千萬里。天風吹いて、海鳴り、山騒ぎ、乾坤皆悲壯の鳴をなす。
耳を側立つれば、寒蛩籬下に鳴きて、聲、絶たむとす。風に向ひて、月色霜の如き往還を行く人
の履齒憂然として金石の響をなすを聞かずや。月下に狂ふ湘海の彼方に夜目にも富士の白くさや
かに立てるを見ずや。

月は照りに照り、凧は彌吹きに吹く。大地吼へ、大海哮けり、浩々又浩々たり。
大なる哉自然の節奏。此月と此風と、殆んど予をして眠る能はざらしむ。
(十二月十日)

凧の湘海

静かなりし世の中、俄かに騒ぎ出でたる心地して、急に立出で見れば、已に凧吹き始めてあ
り。

湘 今までも紫だちたる紺青の色に湛へ居たりし相海は、陣々の風に吹き立てられて、尺に一瀾、寸
に一波、白く起ち、白く倒れて、相摸灘は須臾に白泡白波狂ひに狂い、哮けりに哮けり、滔々泪
々としてまさに沿岸一帯の磯山を押し流しもて去らむとするの勢あり。颯々たる風の波を吹きしふ
くを見よ。濱の眞砂の舞ひ立つて煙の如く渦まくを見よ。落葉と共に、小鳥の飛鳴して吹き飛ば
ざるを見よ。顔を掩へて濱を走り来る漁夫の弓の如く身を張りて走れども一所に止るを見よ。

筆 小坪の山の黄茅波の如くに揺らぎ、峰の松一齊に折れむばかり撓むを見よ。
碧空朗らかにして日色晶々たり。富士も相豆の連山も鮮やかに灘の彼邊に立teri。何處より如
何にして風は吹くぞと怪まるれど、眼を注ぐ所、海も山も人も草木も自ら持する能はずして、狂
奔し悲鳴し動擾す。

吹きつけて夕に近づけば、落日杲々として伊豆相摸の山々、富士の高嶺は渾て紫に變じ、三浦

半島一帯は赫として火の如く夕陽に燃ふるが間を、相摸灘は金濤紫瀾朱波咆哮して、浩々蕩々の音天地に満つ。(十二月十三日)

寒樹

粉雪ちらく、止みて日出でたれど、底寒きこと甚しく、北風終日膚を刺す。日落ちて天紫なり。葉落ち盡したる樺の大樹、幹は老將の如くに硬く、節高なる梢頭より針の如く糸の如き千萬枝縦横に射出で、紫の空を擲楡す。一枝花骨を刺して寒きを覺ふ。上に蒼ざめたる月あり。空に氷りつきたる様なり。(十二月二十日)

冬至

今日は冬至なり。

霜枯の草を踏みて、野外に立てば、一望寒景蕭條として、枯蘆風に戦く音、葉もなき川楊に嘯づる鶴鴿、水涸し野川の音、皆年の行く々暮れなむとするを語る。

(十二月廿二日)

歳除

晴れず、曇れど降らず、鬱陶しき年の暮なり。

吾宿にも、山より松を伐り来りて、立てぬ。前川に泊する舟の上にも、松あり、注連繩あり。天下事無く、吾家事無く、客無く、債鬼なく、また餘財なく、淡々焉として年は静かに暮れ行く。

(十二月卅一日)

風景畫家コロ才

或時富士を眺めて

しら雪の

富士の高嶺は

たかくとも

のぼらばのぼる

道はありなむ

風景畫家コロオ

(一)

オロコ家畫景風

佛國近代風景畫家の父とも云ふ可きジアン、バプチスト、カミール、コロオは、佛國大革命の血未だ斷頭機上に乾かざりし一千七百九十六年に生れ、普佛戰爭の創痍猶新なる一千八百七十五年八十の老齡を以て逝きぬ。彼れ逝いて已に二十餘年、歐洲の美術界は幾多の新現象を以て滿され、名家巧手踵を接して起りしと雖、コロオ終に死せず。其清らかなる詩の如き生涯は、片幅に造化の妙機を縮めて永遠に怡樂の泉となる幾箇の名畫と共に、永く一陣の清嵐を藝林に薫じ、流風餘韻今に到て人をして低徊に堪へざらしむ。

(二)

コロオはもと摘髮師にして後仕立屋を業としたる者の子なりき。巴里に生れて、ルーアンの小學に通ふ七年、次で呉服商の店に入りて八年を経ぬ。然れどもコロオは終にコロオなり。彼は暇に

乗してはセーヌ河畔を漫步して、悠々たる雲水に心目を娛ましめ、或は井ル、ド、アヴェリーの森に朝昏の變態を察し、自然は日々に彼が心を帳簿出納の務より奪ひ去りぬ。恰も好し、畫家ミシヤロンなる者ありて、彼に畫を教ふ。是れよりしてコロオの心はまた商賣の上にあらず。スケッチブックは衣兜に藏められて到る處に隨ひ、帳場の卓は畫臺となりて、風流なる手代は其上に畫紙畫筆を散らし、客來れば匆々に應接し終つて又直ちに畫に向ひぬ。於是父はコロオに諭して曰く、余は卿を一廉の店の主人にもなさばやと思ひ居たれど、今の様に畫にのみ執心せば、吾存命の限りは卿に資本金を與へむと思ひも寄らず、其代り年金千五百法を與ふ可し、其上を望む勿れ。コロオ欣然父の頸を抱いて謝し、即日畫布と畫筆を取つて、第一に見當りし景色の寫生を取りかゝりぬ。老年に及むで、コロオ友人に語りて曰ふ、憶ふ余が初めて畫家となる許を得て寫生にかゝりし其日、父の店に使はるゝ女等少主人の畫をかく様を見むとて幾度となく走り來ぬ、ローズ嬢の如き尤も足しげかりき、嬢は今も存命にていまだに嬢にてあるなり。時々來り省み、前週も來り訪ひしが、余は彼女に對して今昔の感に堪へざるものありき、其時に描きし畫は今日までも聊か古びず、さながら昔のまゝにてあるなり、然れどもローズ嬢は如何に、抑も斯く云ふ余は如何に？と。一年一千五百法は甚だ豊かなりとせず。然もコロオ元來寡欲の人、身に係累なく、

心に希望あり。欣々として一千五百法に衣食し、爾來三十年一錢の多きを貪らず、一毫の負債を醸さざりき。子を知る親に若かず、然も子知らざることまた往々にして親に若かず。後來コロオの名大に揚り、名譽勳章を受くるに及むで、父は猶兒の伎倆を信ぜず、コロオの友に問ふて曰く、貴下、眞實カミールは畫才ありや否やと。友百方コロオを稱賛するも、容易に信ぜず、然も年金を倍し與へぬ。コロオは孝子なりき。曾て伊太利に遊ぶでゼニスに到りし時、父の甚だ寂寥なりと云ふ書翰を見て、即日足を返へしぬ。壯年の日、同輩と會談飲宴興湧くが如き時も、午後九時には其母常に骨牌を闘はさむと待ち居るを以て、必ず退席せり。彼は仁王の如き大男なりしも、羊よりも柔らかなる心をもてり。

(三)

コロオが初の師ミシヤロンは青年畫家にとりて有益なる勸告を與へたり、曰く、自然を見よ、見る所をまさしく描け、感得する所を寫せと。ミシヤロン程なく死して、コロオは更にミシヤロンの師なる井クトル、ベルタンを師としたり。ベルタンは古風の風景畫家、其畫は甚だ器械的形式的なるものなりき。然もコロオは彼に由て形を精確に圖する事及び畫の組立に調子を重ん

ずると云ふ事を學び得たり。一千八百二十五年コロオは羅馬に行きぬ。同輩の畫家は皆彼の畫を笑ひて然も畫家を愛したり。快活溫柔なるコロオは到る處に一陣の清風を齎らしたればなり。一日知名の畫家アリニ來りてコロオが羅馬「コリシナム」の繪を畫くを見、出で、美術家の集會する希臘茶亭に於て、他日コロオは我々一同の先生たるに到る可しと預言したれば、コロオは忽ちにして尊敬と期望を以て待たるゝに到りぬ。二年を経て巴里に歸つて初めてサロンに出品し、爾來死に到るまで四十三年間、年としてサロンの壁上にコロオの畫を見ざるることなかりき。

一千八百三十三年コロオは初めて一賞牌を得、十三年の後フオンテンブルウ林中の景色を描いて名譽勳章を得、九年の後一等賞牌を得、更らに十二年の後二等賞牌と共に更に高等なる名譽勳章を得たり。年又年美術家批評家がコロオを賞賛するの聲は高うなりぬ。然れども世間はコロオてふ畫家の存在することすら知らざりき。彼が父すらも其子の技倆を知らざりき。彼が父の恩恵に由て千五百法の年金を倍し與へられし時は、彼は已に五十歳なりき。彼の畫の初めて賣れし時は彼は已に六十歳なりき。彼が畫初めて賣れ、買主之を持ち去るや、コロオ嘆息して曰く、吁吾畫幅の蒐集は今日迄も全かりしに、今や其一を缺くに到りぬと。此後彼が畫の次第に賣るゝに及で、彼は猶其戯れならざるを信じ得ず。曾て一萬法の價を附し置きし畫の賣れたりと聞きし時、コロ

オは誤つて一箇の零字を落したるものと思ひて、更にサロンの幹事にあらためて其價を書き送りき。一千八百五十八年彼が畫三十八枚を賣りて二千八百四十六弗を得し時、彼は其友の戲談ならむと思ひたり。幸にしてコロオ長命なりしが爲め、彼は生きて其畫の價二十倍するを見るに及びぬ。曾て彼が七百法に賣りし繪、後には一萬二千法に賣るゝに到りぬ。世は彼を識る晩かりしも終に彼を識れり。彼は半生畫に熱中して世間の毀譽に無頓着なりしも、世間は彼の白髮に榮の冠を被せたり。コロオ欣然として曰く、是れ吾の變れるにあらず、吾主義の一定不變なるが終に勝利を獲たるなりと。

(四)

畫家をして高潔ならしめよ。彼をして六塵の欲に誘はれず、超然として專心一意其向ふ所に向はしめよ。彼が心をして媚嫉不平より自由ならしめ、彼をして世間の好惡に淡からしめ、單へに美と眞とに走らしめよ。人間清福の多半は實に彼が有ならん。一架の畫布は彼が帝國なり、一尺の畫毫は彼が王笏なり。彼は竭きざる自然の泉を汲むで、自から服し、人に服せしむ。箇中に無限の快樂あり、慰藉あり、生命あり。コロオの如きは實に帝王も享くる能はざるの幸福を有するも

のなりき。

彼は自然の兒なり。軀幹倔强にして、終生病を知らず。性情和平にして又快活、彼の身邊には常に清風吹けり。彼は苦むでパンを得るに及ばず、更に一係累の彼の心を擾はすなかりき。彼は時あつてか失望せり——誰か失望せざらむ。時あつてかサロンに出品したる吾畫の目につかぬ片隅に掛けられたるを見ては心を痛め、時あつてか盲評者の惡口を聞いて眼底に涙ありき。然れども是れ一霎時の浮雲、一たび畫架に向へば消へて跡もなかりき。曾て歎じて曰く、若し繪畫は愚か事と云はば、誠に愉快なる愚か事と云はざる可からず、余が容貌を見よ、健康を見よ、不幸なる人々の容貌にあらはるゝ辛勞野心悔恨の跡何れにあるや、斯くも平和と満足健康までも齎らすの技術をば、奈何んぞ愛せざるを得んやと。畫はコロオの初戀、コロオの妻、コロオの食、コロオの渾てなりき。彼は世の愛を求むるに心なかりしも、然れども彼を識るは彼を愛する所以なりき。彼が年壯きや、畫家の集會は彼を得て歡を添へぬ。彼が年老ふるや、巴里の畫家を擧げて彼を稱するに爺々コロオを以てし、彼が如く敬愛せられたる者なかりき。彼が在る所、熱心なる美術學生等は先を争ふて其膝下近く寄りこぞりつゝ、愛慕と歎美を以て白髮の彼が唇より出づる一語々々を吸収せり。窮困の畫家には金を與へ、後進の青年には懇切の助言を與へ、彼は年配に於

ても、徳望に於ても、眞に佛國美術家の爺々なりき。

コロオ甚だ書を讀まず、其交友は彼と共に佛國繪畫刷新の功勞を分つルウソウ、ミルレー、ダウビニー等を初め美術家の範圍の外に出でざりき。三たび伊太利に遊び、一たび瑞西より荷蘭英國に遊びし外は、多くは、ギル、ド、アヴレーの林邊に住み、また巴里にも畫室を有せり。彼れ尤も音楽を嗜み、巧みに歌ひ、而して天然を説くに到つては、語々皆詩なりき。彼が老骨槎枒、白髮赭顔、細眼巨口、皺多き面に髻なく、段だら染の木綿の寢帽を被り、寛博を着て、長き陶製のパイプを啣へつゝ、畫架に向ふ所は、佛國無双の風景畫家と云はむより、一見老車夫の如くなりき。彼は自然の兒にして、また平民兒なりき。彼が道の眞中に畫架を据ふる時は、村嬢車丁も過ぎがてに彼と言ふを樂みたり。

コロオの一生に於ける陰雲は、普佛戰爭なりき。彼は述懐せり、吾若し畫を知らずば、戰爭の爲めに狂亂しつらんと。また曰く、美術の極意は唯愛なり、戰爭の惡戰爭の怨に比すれば果して如何にと。然れども巴里籠城の事愈定かなるや、彼は老愛國者の意氣を以て、直ちに巴里に歸り來り、其財囊を擧げて防禦用及傷疾病救助用に供し其時を分つて或は畫に向ひ或は病困者の慰問に向へり。彼が晩年の名畫幾枚は實に此間に成りき。一千八百七十四年其畫の展覽會に上るや、彼

は再び名譽特別大賞牌を與へられむとして其議かはりぬ。然も全國の美術家は連署してコロオに書を贈りて曰く、畢竟するに賞牌は物の數にもあらず、最大の名譽はコロオと云はるゝにありと。此後程なく畫家仲間美術嗜好家等協同鑲金して、一大金牌を造りてコロオに贈りぬ。コロオ欣然として曰く、斯くも愛せらるゝこと思へば人をして欣喜に堪へざらしむと。

此年コロオが久しく共に棲みたる妹死して、コロオまた衰へぬ。彼は病床に侍する門弟を顧みて曰く、余は何の憾む所なし、七十八年の間壯健にして、五十年間専ら繪畫に従事したり、吾家族は皆正直なる人々にて、吾朋友は皆良友なりき、余は生涯何人をも害したることなし、吾運命は眞に幸福なりき、余は満足し感謝するの外なしと。彼は其父の死せしが如く死せむと欲して、翌日僧を病床に請ぜり。然も彼が臨終の一念は畫にありき。彼れ已に瞑せむとす。右手恰も畫毫を握るの態度をなしつゝ、叫んで曰く、呼美しきかな、吾は未だ斯る美しき風景を見ずと。即ち瞑しぬ。

コロオ終身娶らず、書を以て妻となしぬ。彼が一生は彼の畫の如く清うして且和やかなりき。葬儀の時に臨み、美術局長シャンヌヰールは彼の墓畔に演説して曰く、巴里の少年皆君を愛しぬ、君は常に少年を愛し而して君が才は永遠に老いざるの少年其ものなればなり、……君は其千

載。朽。ち。ざ。る。の。名。作。に。於。て、其。畫。け。る。青。空。綠。樹。禽。鳥。を。以。て。上。帝。を。讚。美。し。たり。と。語。未。だ。了。ら。ざ。る。に。一。羽。の。紅。雀。あり、墓。畔。の。樹。枝。に。飛。び。來。つ。て、忽。ち。一。道。の。清。歌。を。發。し。ぬ。と。云。ふ。
一。千。八。百。八。十。年。コロオの友人等相謀つて、彼が生前常に好むで畫架を据へたりしギル、ド、アヴレーなる小湖の畔に一片の石碑を建てぬ。十有餘年の春風秋雨は憶ふに未だ甚だ石碑の面を磨せざる可し。語を寄す、我が美術愛好の士、若し佛國に遊ぶで或は石碑の下に到るの日あらば、爲めに一盃の水を酌ふを忘るゝ勿れ。

(五)

コロオが風景畫家たるは何人も知る。彼が常にギル、ド、アヴレーの林を愛して多くは畫架を此林邊に据へ、殊に春天綠樹の節を愛し、朝暉夕陰の時を愛して之を畫きしは何人も知る。然も彼が範圍は此に止まらず。彼は四季を畫き、月夜を畫けり。彼れが畫ける何れの風景畫にも、殆んど人物あらざるはなし。彼は聖經の畫を描き、花卉を描き、市街を描き、動物また裸體人物を畫き、肖像四十餘枚を畫けり。彼がスケッチブックは森羅萬象の寫眞なり。コロオの如く勉強したる者少なかる可し。少より老に到るまで、彼が一枚の畫を成さむとして、其準備の爲めに畫きた

る下畫は殆んど無數なり。彼が警語は良心なり。學生は皆彼を稱するに良心の諱名を以てし、學生の如何にして畫く可きかを問ふ者には彼即ち良心の一語を以て答へたり。コロオ曰く、眞は美術の第一義、而して第二義、第三義なりと。彼が如く自然の研究を積みたる者は稀なり。彼が如く自然の眞を捉へむと務めたる者は稀なり。彼が一架の畫幅に向ふや、或は三軍の師が決戰の場に向ふよりも眞面目なりき。

曾て曰く、畫家の先づ畫く所は自然に服従したるの畫なり、所謂畫を成すの期之に次ぐと。コロオの如きも、其初年の作は汲々として自然の一點一畫を謹み、筆細かに意肅みたるものなりき。中年以後、眼光ますます高く、運筆いよく老熟するに及びて、其小を措きて其大を攫み、其部分の後にして其全幅を先にし、揮灑甚だ自由にして、眞に波瀾老成の感ありき。彼は多年の經驗を積むで、解剖的に物を畫かむよりも、吾見る所を畫かむことを務め、所謂部分の事實よりも、事實の一致して生ずる所の結果を畫かむことを務めぬ。渾ての事に於て、老熟に到るまでの間には、人は多く學ぶ所なかる可からず、また忘るゝ所なかる可からず。コロオの如きも、其知る所の瑣事を忘れ、見る所の小部分に瞑目し、除き且抑へ、一個の大畫を纏繞する幾箇の小畫趣小風景を削り去つて、初めて一幅の畫を成しぬ。彼は先づ解剖的に自然を研究して、終に総合的に自

然を描きしなり。彼が畫の渾熟廣濶なるは精確なる知識に基いて來り、其自由自在なるは事實に忠實なるより來り、其感情の馳騁縱横なるは道理を離れず繩墨を忘れざるに伴ふ。彼は先づ自然を見るに尤も忠にして尤も自然を描くに忠なりしが故に、尤も自由なる詩的なる風景畫家たるを得たりき。

(六)

現世紀の半は、佛國美術の一段落なりき。似而非なるクラシック風の畫は時代の精神に驅り去られて、畫家の天地頓に廣大となれるは此時なりき。去ればクラウド、プーサンの名と共に殆んど記憶に過ぎざりし風景畫も、荷蘭風を帯びたる英國畫の刺戟により、更に溯つて荷蘭の質實朴素なる畫風其ものゝ刺戟により、死せる型的の桎梏を脱して、一新派一新傾向を生むの運に到りぬ。デオルヂ、ミセールの如きは其先驅なりき。次でコロオ、ミルレー、ルウソウ乃至トロヨン、デユブル、ダウビニーの諸大家フォテンブルウの林邊より雪崩の如く佛國美術界に押し出して、各々其方面に生面を開き、恰も眉山の三子京に出で、蘇氏の文章天下を風靡したるが如く、昏睡せる美術は俄然醒覺して革新の途上に大濶歩するに到りぬ。諸子は實に佛國の美術をして今日の

如く振はしめたる中興の元勳にして、コロオの如きは麒麟閣上一二に名を留むるの人なり。

コロオ曾て曰く、畫家に四の務あり、第一は形、圖して模するを得、第二は色、比較輕重を注意して是を得、第三は感情、受け得たる感象より生ずるもの、第四は運筆、以上の三者を總ぶ、余の如きは、自から思ふ、感情は即ち之を有すと、即ち余が心中聊か詩のあるありて余をして以て見且見る所を全ふするを得せしむ、然れども色は往々にして之を失し、形を圖するの技倆は甚だ乏しく、運筆も屢失敗を免れず、是を以て余はいよく努力して已まざるなりと。彼は眞に自から知れり。彼が用ふる所の色は、今日の或名家が用ふる色程種類に富まず。彼が畫ける人物は解剖學上の弱點甚だ少なからず。彼が運筆は、一點一畫も鑑賞家を喜ばす程の手際にあらず。然れども此等の缺點あるに關せず、千載永くコロオ在るものは何ぞ。彼は十分に自然を愛し、自然を解し、自然に同情を有し、而して活ける自然を傳ふことを務めたり。自然は生く。一秒時も同じからず。唯一叢の林、然れども朝の林は夕の林にあらず。唯一泓の小湖水、然れども彼時の水は此時の水に異なり。彼は實に死せる自然の繁瑣なる目錄標本を臚列することを屑とせずして、務めて此活ける變化ある自然の意、自然の詩、自然の情態、自然の相を活寫したる者なり。彼は此相を捉へむが爲めに、其畫題の大形と其全體の調子を見、一團の色と他の色との大關係を見、

空の面目大氣の性質光の浮游を察し、空と氣と樹葉の斷えず脉拍顫動する機微を攫まんことを務めぬ。故を以てコロオの畫、草は其硬軟乾濕を知る可く、木は厚薄明暗宜しきを得て、彼が常に誇りし如く小禽も其枝に舞ひ木の葉の奥の奥までも光線の透徹し得るを見る可く、成は青空の靜かに遠うくして然も浮動生けるが如き、或は白雲の輕ふして觸るれば融けんとする、物の上或は下、前若くは後、外乃ち内、凡そコロオの畫、處として大氣と日光の流動包繞するを見ざるはなし。左れば限りなき杳々の遠きを寫し、深遠澄明、光あり聲無ふして然も微動する青空を寫す、古來未だコロオの右に出る者あらず。大氣を畫き、流動浮游到らざる處なき日光の性質を畫きたる者またコロオを以て射鵰手に推さざるを得ず。

彼は似而非クラシツクを排して新畫風の勇將となりしと雖、醇乎たるクラシツクの精神は即ち之を棄てざりき。彼はギル、ド、アヴレーの窓に神仙と泉水を夢みし時より已に一種理想的詩人なりしと雖、彼が畫く所は其眼を経たる自然の實を取りたるものなりき。彼が畫は以て希臘羅馬人に見せしむ可し、然して今日の佛人も之を嘆美するを禁ずること能はず。彼が用ふる所の色は、重に褐色灰色淡綠色にして、人目を閃眩するの色を用ゆること稀なり。然れども其用ふる色の範圍に於ては其妙を極む。調和は單調の謂にあらず。調子は實を狂ぐるの謂にあらず。コロオは尤

も此際の比較輕重の研究を積むで超絶なる調子の眼を有しぬ。彼は能く其色を眞にし、其調子を全ふす。故にコロオの畫、幅面常に沈着にして輕躁ならず、平和にして唐突ならず。ミルレー、ルウソウ等平生彼と肘を把て前後を争ふの大家と雖、此點に於ては確に瞠若たる所なき能はず。コロオが幾多新進畫家の模範として其嚮導たりしものは、此等の仔細あるが爲なり。彼は或點に於て實に、^{アケレツシヨニスト}印象派の第一先登なりき。彼が逝きし以來、戶外の大氣を描き日光を描き日光に於て見る物を描くの術はいよく進歩し、新更に奇を加へ、今はコロオの夢想だも及ばざるの點に到らんとするものあり。然も其系統を繹ぬれば、一線繋つてコロオの墳上にあるを見る。

(七)

彼は自然の兒、畫毫を握れる詩人なりき。其の尤も及ぶ可からざる所は即ち此處にあり。其の尤も愛せらるゝ所以また此處にあり。古來幾多の畫家、彼よりも美なる風景を畫きし者はあり。未だ彼が如く渾身皆詩なるはなかりき。彼は眞に無聲詩人なり。他の描く所多くは色あるの散文、彼れ即ち眞個無聲の詩を書けり。

彼は荷蘭の感化を受けし英國の畫風よりして一點寫實の機を覗ひ、初年の師及伊太利の遊よりし

てクラシック風の粹を吸ひ、荷蘭の畫風よりして質實沈重の風を含み得たり。然れども彼が眞教師は自然なりき。ヲオヅヲルスの如く彼が眞個の畫室は野外にありき。彼は甚だ學校アカデミーを好まず、古大家の畫も手必ず摸寫せずとも眼を以て熟視すれば足ると唱へ、畫家の心を養ひ手眼を養ふには廣大なる自然の學校に若くものなし、一たび此學校に入る者は永く之を去る可からず、常に此に來らざる可からずと云へり。彼は眞に自然に養はれたるの畫家にして、更に學校畫室の臭味を帶びず、設令其の畫風は衣冠の公卿よりも亂頭粗服の野人に似たる所なきにあらざると雖、却て其中に掩ふ可からず奪ふ可からざるの天趣を帶びたり。詩篇の愛誦せられ、ヲオヅヲルスの愛誦せられ、ボルンスの愛誦せられむ限り、コロオが無聲詩は永く人間の至寶たらむ。彼が一千八百六十一年に描きしオルフィアス朝を迎ふるの圖の如き、何等の清淨、何等の詩趣ぞ。朝陽上らんと欲して金光見るく、殘夜の雲を追ひ、露を帶ぶるの高樹三兩株恰も眠より寤めて、千萬の細葉朝涼に動いて聲あり。詩人琴を撃げて其下に立つ。靜かにして觀來れば、朝光紙上に漲り、清涼の朝氣水の如く浮動するを覺え、靜かにして聞けば、木葉の囁き、禽鳥の和鳴も、聞く可きを思ふ。此時に當つて、誰かまた此光に浴し、此氣を吸ひ、此歌を聞き、此天の遠きを望み、此朝の清きに浸されて、オルフィアスと共に心を空にして朝を迎へざるを得むや。彼が一千

八百五十一年に畫きたる聖セバスチアンの畫の如き、また實に此と共に双壁と稱するもの。畫は、垂死の聖徒横はりて地にあり、聖尼兩名左右に待す、地は蔭深き林壑なり、左右には巨大の老樹鬱々森々として聳立す、樹絶ふる所遠景に小丘を見せ、丘上騎馬武者あり空に映じて立つ、小兒の天使兩人あり、手に殉道の棕櫚葉を執つて高く垂死の聖徒の上に舞ふ、時は昏黄なり、樹下殆んど昏黒、然れども空に光あり、大氣に香あり、悲壯にして沈鬱、和平にして且莊重、オルフィアスの畫と共に朝昏相對して眞に聯璧の觀あり。若し其「子ミー湖」「薪拾ひ」「風景と牛馬」を始めとしてフォンテンブルウの諸景等に到ては、或は悠揚、或は瀟洒、大なるものは長篇の詩の如く、小なるものは短歌の如く、人をして咏嘆玩味盡くる所を知らざらむ。

彼は風景畫題を撰むに於ても、午時よりも朝暮の時を愛し、偉大威力恐怖沈痛の如き者よりも悠揚和平なるものを好み、風雨を描き突兀饒確たる荒寥の景を描かんより寧ろ舒びやかなる風景和やかなる自然の態度を描くを好みぬ。彼が筆力は、骨力を和平に寓し、法度を自由の中に寄せたるものにして、彼が畫は決して艶麗纖巧なるものにあらず、寧ろ田舎漢の如く剛壯なるものなりき。然も彼は自づから平和の畫家なりき。彼の使命は人間に向つて靜和の怡樂を分かち、慰藉を與へ、自然の喜に與らしむるにありき。曾て曰く、チラクルアキス君は猛獸の如し、余の如きは一

羽の小禽兒のみと。彼れ斯くの如く謙卑したりと雖、また自から抱負なきにあらざりき。常に曰く、諸君がおのゝ自家の短所を養ひ補はんと務むるは好し、然れども何よりも先づ諸君自家の天性に順ひ諸君自家の眼光に依頼せよ、是れぞ良心また誠實とも云ふものなり、其他は顧みるに及ばず、然らば諸君は幸福にして成功するを得んと。彼は詩情滿身、自然の風景をとつて、自家の詩腸詩眼によつて洗練して出す詩人的畫家にして、また自から知り、信ずる所を守つて更に動ぜざる豪傑の士なりき。

(八)

余は眞にコロオの畫を愛す、更に畫家其人を絶愛す。彼が生涯の片影を見て、更に思を騁すれば、二十餘年前彼が白髪を圍繞して其老いて猶壯なる唇より金玉の辭を吸ひし巴里の青年諸生を羨まざらんと欲するも能はざるなり。

詩は別才あり、畫も亦別才なしとせず。然れどもヴァチカン殿内の大壁描は千載永くミケランジエルの雄魂を傳へ、聖母基督の一幅優美にして溫柔なるラファエルの人物を畫面に彫りて今日に到るを思へば、事業は眞に人物の影にして、畫家が造次にも畫く所の一枚一枚は白日世間に自家

の肺腑を曝すの懺悔録たるを思はざる能はず。畢竟詩は詩人、畫は實に畫家、豊田嘉禾を結び、澄泉清水を吐く。コロオの畫はコロオを描きしなり。コロオ逝いて已に二十餘年、彼が白骨は已に土中の灰となるも、彼が世に遺し、名畫幾幅は、今も猶自然の美を歌ひ、上帝の愛を歌ふて、斯の辛き世に於て限りなき平和怡樂の源泉となり、見る者をして清からしむ。而して彼が八十年の生涯に於て、清淡寡慾、溫柔敦厚、快活にして人を愛し、謙和にして物と争はず、然も世に阿らず、人に求めず、特立獨行一意其信する所を守つて動かず、心を虚ふして一生を繪畫に供したるの經歷は、後の美術家が細心臨摸す可き絶好の粉本として、幾世の後に残らむ。

自然と人生 大尾

徳富健次郎著

自然と人生

印刷中

「題して自然と人生と云ふも、地人の關係を科學的に論ずるにあらず、畢竟著者が眼に見耳に聞き心に感じ手に従つて直寫したる自然及人生の寫生帖の其幾葉を公にしたるものゝみ。」

以上は著者自ら謂ふ所。

自然を主とし、人を客とし、舊稿の粹を抜き、新作の秀を萃めたる小品の記文、短篇の小説、無韻の詩とも言ふ可く、水彩の畫とも云ふべきもの、無慮百篇を一巻に收む。

銷夏の讀料には尤も妙ならん。

明治三十三年七月五日 國民新聞

「自然と人生」岩波文庫版について

一、原本

- 原本は徳富家所蔵の初版本、同第三版である。
- 初版本は著者が夫人に贈呈せる記念の書であり、第三版は著者入朱の蔵書である。

二、體裁

- 大いさ、装幀(表紙)、本扉、奥附等は全然本文庫の體裁に従つた。
- 本文に於ても、體裁上の一般的變更は加へた。活字五號を八ポイントに、字詰三十字を四十三字に、行數十行を十四行に夫々更めた事。各頁に柱を設けた事。見出し及小見出しの行どりを整理した事等である。
- 中扉、丁換へ、頁換へ、行換へ等は凡へてもとの形に準じた。
- 初版の本扉の次に在つた蘆花氏著書の廣告は省いた。
- その位置に、その對向面即ち本扉裏の歐文を移し、從來廣告裏に在つた短序をそのままに、共に一丁とした。
- 目次の頁は、此の版によつて直した。

- 口繪を新に附けた。(次項参照)
- 原本の體裁は、右の口繪によつて、その面影を傳へた。
- 卷末に新に添へた「廣告文」は著者の草稿をもととして成つたもので、明治三十三年七月五日國民新聞紙上に掲載されたものである。

三、口繪

- 口繪の一、表紙の圖は前記初版本を寫せるもの。蘆と白帆の繪は著者自身の筆になる。
- 口繪の二、「呈黃花女史 蘆花生」は夫人へ贈りし前記初版本開卷第一頁の白紙に認められしもの。
- 口繪の三、「四年間日夕吾を慰め吾を誨へ吾汚を洗ひ吾を復活せしめたる富嶽と湘海とに此小冊子を捧ぐ」は第三版開卷第一頁の白紙に認められしもの。
- 口繪の四、同第三版の扉にして「千歲村 徳富」の印は著者自筆を彫らしめた愛用の藏書印である。
- 口繪の五、第三版入朱の一例を示す。
- 口繪の六、初版の奥附を示す。

四、校訂方針

- 前記初版本を底本とし、同第三版の著者入朱に據つて訂正を施した。
- 原稿が残存しない今日、それに最も近き初版及び著者が書込みせる第三版の二冊に據るを最善と信じたからである。
- 右初版第三版以後の版には全然據らなかつた。全集版にも亦全然關らなかつた。
- 即ち、それらの各版は概して文法上の正確さに近かんとした事は認め得るも、その爲に却つて必要以上の手が加へられた憾みがある。それらをすべて避けて嚴密に初版に據つた。

以下具體的方針を示す。

- 純然たる誤植は之を正した。
- 振り假名を施したる特殊な訓みは殊に尊重した。
- 振り假名に加除を行はず、繁簡すべて初版どほりとした。但し振り假名と送り假名と重複誤植されたものは凡べて振り假名の方を削つた。
- 現在の文法上より見て誤りとさるるものも、時代の慣用、著者の慣用、當時の著者の癖、方言等は特にそのまゝ保存した。
- 其當時に於ける著者の癖であるか否か遽かに定めがたいものは、その後の時期を異にする別の原稿に就いて調べても推測斷定すべくもあらぬ故、凡べて初版のまゝとした。
- 殊に、假名遣ひ(振り假名を含む)の混雜は、當時の著者の面目を傳へるものとして、同一頁に於ける混用すらも敢へて統一することをせず、著者の拘泥せざる劃一的ならざる妙味を残し

た。

○況して何れにても差支へなきものは兩様三様保存した。同一文字に或る所は送り假名を施し、或る所はそれを略したるが如きは何れにても差支へなきものと認めた。俗字略字變體假名等も同じ考へから初版通りとした。


○幸ひ文庫には教科書版が別に在る故、その方は一切正しい文法に據つて統一することとした。それに依つて本文庫版は一層初版版であるべく方針を確立した。

○以上の如き方針の下に、尙遽かに解決し難き例外あり。それらについては幸ひ終始著者の傍に在つて著者の仕事に參與せる夫人の裁斷を俟つて決定するを得た。

(大森製本)

岩波文庫
881-882

昭和八年五月二十日印
昭和八年五月二十五日發行



自然と人生 ★★
定價四十錢

著者	德富蘆花	
發行者	東京市神田區一ツ橋通町三番地 岩波茂雄	
印刷者	東京市神田區錦町三丁目十七番地 白井赫太郎	精興社印刷

發行所
東京市神田區一ツ橋通町三番地

岩波書店

電話 〇〇一八七・〇〇一八八
九段 二〇三三番(小賣部) 〇〇一八八
振替口座東京二六二四〇番

徳富健次郎著

「みみずのたはこと」

四六判八二四頁
別刷挿繪十三葉
定價二圓八十錢
送料書留卅三錢

「みみずのたはこと」は著者一世の代表作と云はれる。この書は著者が年四十にして順禮紀行の旅から歸り、武藏野に田園の生活をはじめた最初の收穫であり、天にあこがれた靈魂がはじめてしかと大地に脚をたてた生活記録である。大正二年はじめて出版せられてから版を重ねること百餘版十萬部といふ大部數を、學校に、家庭に、工場に、教會に、あらゆる讀者層におくつた、しかして本書こそひとり蘆花快心の作たるに止まらず、實にわが近代文學史上不朽の名作である。そこには時流の「執」と「濁」とを遠く超ゆる精神がある、永遠に生きる明朗の魂がある、土の上に生活して生あり、死あり、而して復生ある生命の連鎖に繋がる限り「みみずのたはこと」は永遠に人の子の胸に生きるであらう。

本書は震災後の復活本を底本とし、嚴密なる校訂方針のもとに完成した定本である。復活版に於て著者が舊版から削除した數篇、全集にもれた「蝶の語れる」一篇其他を加へ、著者逝いて七週年、今裝を新たにして小店より出版することになつた。

「みみずのたはこと」を岩波書店から出版するに就て

本著は當初の出版者故服部國太郎氏、新橋堂野村鈴助氏より福永一良氏の手に移つたものでした。昭和二年著者の死に次いで一良氏も世を去り、ために養親なき遺兒の如き有様で今日に至りましたが私としてそのまゝ捨置がたく、これを書店より私の手に收め自力出版を企てました。然し病臥三年、齡六十を數ふる女の身の之を成し遂ぐるは容易のことではないのを悟り、且つ一日の遅延が或は百年の恨とならんことを恐れ、これを岩波茂雄氏に諮りましたところ幸ひに氏の快諾を得、こゝに初めて新生命を與へて同書店から出版することになりました。今度の出版は、大正十二年の大震災後著者がその序に記して舊版から削除したる數篇、全集に漏れた「蝶の語れる」一篇及び序二篇を加へ、更に著者草するところの廣告文數種を添へ、これを定本として世に贖ふことに致しました。

昭和八年春

亡夫の七週忌を今秋に控へて

徳富愛子

讀書子に寄す

岩波文庫發刊に際して

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に任せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽す誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推舉するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議の際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一つの投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうはしき共同を期待する。

昭和二年七月

既刊書目

國文學	萬葉集 上卷 佐佐木信綱編 ***	源氏物語 (一) 島津久基校訂 **	法華義疏 上卷 聖德太子御製 花山信勝校訂 **
	萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 ***	源氏物語 (二) 島津久基校訂 **	正法眼藏隨聞記 和辻哲三校訂 *
	萬葉集 上卷 佐佐木信綱編 ***	源氏物語 (三) 島津久基校訂 **	日蓮上人文抄 姉崎正治校訂 **
	萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 ***	源氏物語 (四) 島津久基校訂 **	歎異抄 金子大榮校訂 *
	古事記 幸田成友校訂 *	土佐日記 池田龜鑑校訂 *	徒然草 西尾實校訂 *
	日本書紀 上卷 黒板勝美編 *	紫式部日記 池田龜鑑校訂 *	方丈記 山田孝雄校訂 *
	日本書紀 中卷 黒板勝美編 **	更級日記 西下經一校訂 *	花傳書 野上阿彌校訂 *
	日本書紀 下卷 黒板勝美編 **	枕草子(春曙抄) 上卷 池田龜鑑校訂 **	申樂談 義野上阿彌校訂 *
	古語拾遺 加藤玄智校訂 *	枕草子(春曙抄) 中卷 池田龜鑑校訂 **	能作書・覺習條條 野上阿彌校訂 *
	水鏡 和田英松校訂 *	枕草子(春曙抄) 卷中 池田龜鑑校訂 **	至花道 野上阿彌校訂 *
	大鏡 和田英松校訂 **	倭漢朗詠集 山田孝雄校訂 *	入木道三部集 岡鹿校訂 *
	増鏡 和田英松校訂 **	古今和歌集 尾上八郎校訂 **	奥の細道 伊藤松宇校訂 *
	三條西榮花物語 上卷 三條西公正校訂 **	新古今和歌集 佐佐木信綱校訂 **	芭蕉七部集 伊藤松宇校訂 **
	三條西榮花物語 中卷 三條西公正校訂 **	新古今和歌集 佐佐木信綱校訂 **	芭蕉連句集 小宮豊隆編 **
	三條西榮花物語 下卷 三條西公正校訂 **		芭蕉俳句集 眞原退蔵校註 **
			燕村七部集 伊藤松宇校訂 **

風俗文選	伊藤松字校訂★★★	武家義理物語	和田萬吉校訂★	鼠小僧	河竹繁俊校訂★★★
鶉	衣石田元季校訂★★★	武道傳來記	和田萬吉校訂★	實錄先代	萩河竹繁俊校訂★★★
おらが春・我春集	萩原井水校訂★	西鶴諸國咄	和田萬吉校訂★	笠森	三河竹繁俊校訂★★★
柳多留	上卷 西原柳雨校訂★★★	本朝櫻陰比事	和田萬吉校訂★	鳩の平	小僧門河竹繁俊校訂★★★
柳多留	中卷 西原柳雨校訂★★★	椿説弓張月	上卷 和田萬吉校訂★★★	小説・戲曲・詩歌・隨筆・評論	
柳多留	下卷 西原柳雨校訂★★★	椿説弓張月	中卷 和田萬吉校訂★★★	こゝろ	夏目漱石著★★★
萬載狂歌集	野崎左文校訂★	椿説弓張月	下卷 和田萬吉校訂★★★	道	草夏目漱石著★★★
徳和歌後萬載集	野崎左文校訂★	國性爺合戰	近松門左衛門作	行	人夏目漱石著★★★
松の葉	藤田徳太郎校註★★★	鏡の権三重帷子	和田萬吉校訂★	漾	集夏目漱石著★★★
松の葉	藤田徳太郎校註★★★	會我會	山近松門左衛門作	草	枕夏目漱石著★★★
閑吟集	附室町小歌拾遺集 藤田徳太郎校註★★★	心中天の網島	和田萬吉校訂★	坊	つちやん夏目漱石著★★★
好色一代男	西田萬吉校訂★★★	浮世風物	和曲馬橋作	五重	塔幸田露伴著★★★
好色一代女	西田萬吉校訂★★★	浮世	和曲馬橋作	風流佛	一口劍幸田露伴著★★★
好色五人女	西田萬吉校訂★★★	東海道膝栗毛	十返舎一九作	二人	女房尾崎紅葉著★★★
日本永代藏	西田萬吉校訂★★★	酒落本集	高木好次校訂★★★	觀音	岩前篇川上眉山著★★★
世間胸算用	西田萬吉校訂★★★	加賀	河竹繁俊校訂★★★	觀音	岩後篇川上眉山著★★★
西鶴織留	和田萬吉校訂★★★	赤垣源藏・仲光	河竹繁俊校訂★★★	墨汁	一滴正岡子規著★★★

にこくり	え樋口一葉著★★★	倭儒の言葉	芥川龍之介著★★★	仰臥漫錄	正岡子規著★★★
うたかたの記	他三篇 鷗外著★★★	河	童芥川龍之介著★★★	子規歌集	正岡子規著★★★
新曲	島坪内道遠著★★★	厭世家の誕生	日佐藤春夫著★★★	左千夫歌論	抄土屋文明編★★★
源をぢ	他二篇 岡本獨歩著★★★	入江のほとり	正宗白鳥著★★★	左千夫歌論	抄土屋文明編★★★
號外	他六篇 岡本獨歩著★★★	生まざりしならば	正宗白鳥著★★★	上田敏詩	抄茅野蕭々編★★★
櫻の實の熟する時	島崎藤村著★★★	大石良雄	野上彌生子著★★★	晚翠詩	抄土井晚翠著★★★
千曲川のスケッチ	島崎藤村著★★★	海神	丸野上彌生子著★★★	藤村詩	抄島崎藤村自選★★★
飯倉だより	島崎藤村著★★★	出家とその弟子	倉田百三著★★★	有明詩	抄蒲原有明著★★★
春を待ちつゝ	島崎藤村著★★★	布施太子の入山	倉田百三著★★★	泣菫詩	抄薄田泣菫著★★★
生ひ立ちの記	島崎藤村著★★★	幸福	武者小路實篤著★★★	文道遙遺稿	抄金築松桂譯★★★
蒲團・一兵卒	田山花袋著★★★	そ	武者小路實篤著★★★	歌舞音樂略史	小中村清矩著★★★
田舎教師	田山花袋著★★★	人間萬歳	武者小路實篤著★★★	俗樂旋律考	上原六四郎著★★★
小僧の神様	他十篇 志賀直哉著★★★	友	情武者小路實篤著★★★	蘭學事始	杉田元白著★★★
和解	或る男 志賀直哉著★★★	煤	煙森田草平著★★★	茶の	本岡倉覺三著★★★
其姉の死	男 志賀直哉著★★★	波	山本有三著★★★	綱島梁川集	安倍能成編★★★
陸奥直次郎	長興善郎著★★★	病牀六尺	正岡子規著★★★	清澤文集	清澤穉之著★★★

福澤撰 集福澤論吉著
北村透谷集 島崎藤村編
海舟座 談巖本善治編

外國文學(小説・戯曲・詩)

杜 詩卷之一 漆山又四郎譯註
杜 詩卷之二 漆山又四郎譯註
杜 詩卷之三 漆山又四郎譯註
杜 詩卷之四 漆山又四郎譯註
陶淵明集 漆山又四郎譯註
唐詩選 上卷 漆山又四郎譯註
唐詩選 下卷 漆山又四郎譯註
李太白詩選 上卷 漆山又四郎譯註
李太白詩選 下卷 漆山又四郎譯註
支那通俗古今奇觀 漆山又四郎譯註
朝鮮童謡選 金素雲譯編
即興詩人 上卷 森 鴨 外譯
即興詩人 下卷 森 鴨 外譯

ブラントイブセン作
幽霊 小宮豊隆譯
父 妻 小宮豊隆譯
令嬢 ユリ エストリントベルク作
オネーギン 米川正夫譯
イワーニイワーノキツチ
キツチとが喧嘩をした話 原久一郎譯
檢察官 米川正夫譯
現代のヒーロー 中村白葉譯
皇帝 フョードル アカトルストイ作
初恋 米川正夫譯
罪と罰 第一卷 中村白葉譯
罪と罰 第二卷 中村白葉譯
罪と罰 第三卷 中村白葉譯
カラマーゾフの兄弟 第一卷 米川正夫譯
カラマーゾフの兄弟 第二卷 米川正夫譯

カラマーゾフの兄弟 第三卷 米川正夫譯
カラマーゾフの兄弟 第四卷 米川正夫譯
貧しき人々 ドストエフスキイ作
永遠の良人 ドストエフスキイ作
戦争と平和 第一卷 米川正夫譯
戦争と平和 第二卷 米川正夫譯
戦争と平和 第三卷 米川正夫譯
戦争と平和 第四卷 米川正夫譯
戦争と平和 第五卷 米川正夫譯
戦争と平和 第六卷 米川正夫譯
戦争と平和 第七卷 米川正夫譯
戦争と平和 第八卷 米川正夫譯
戦争と平和 第九卷 米川正夫譯
戦争と平和 第十卷 米川正夫譯
イヴン・イリツチの死 米川正夫譯
結婚の幸福 米川正夫譯
光あるうちに光 米川正夫譯
クロイツェル・ソナタ 米川正夫譯
復活 上卷 中村白葉譯
復活 中卷 中村白葉譯

復活 下卷 中村白葉譯
闇の力 米川正夫譯
生ける屍 米川正夫譯
幼年時代 米川正夫譯
少年時代 米川正夫譯
人は何で生きるか 他四篇 中村白葉譯
トルストイ民話集
イワンの馬鹿 他八篇 中村白葉譯
櫻の園 米川正夫譯
伯父ワニーヤ 米川正夫譯
三人姉妹 米川正夫譯
サーニン上卷 中村白葉譯
サーニン下卷 中村白葉譯
賢者ナータン 大庭米治郎譯
ヘルマンとドロテア 佐藤通次譯
半ルヘルム上卷 久男譯
半ルヘルム下卷 久男譯
マイスタ下巻 久男譯
フアウスト第一部 森 鴨 外譯

フアウスト第二部 森 鴨 外譯
若いゾルテルの悩み 茅野蕭々譯
ヴレンシュタイン 鼓 常 良 譯
ヴィルヘルム・テル 櫻井政隆譯
全グリム童話集 第一 金田鬼一譯
全グリム童話集 第二 金田鬼一譯
全グリム童話集 第三 金田鬼一譯
全グリム童話集 第四 金田鬼一譯
全グリム童話集 第五 金田鬼一譯
全グリム童話集 第六 金田鬼一譯
全グリム童話集 第七 金田鬼一譯
ゲエテの對話抄 エツケルマン著
春の目ざめ 野上豊一郎譯
埋木 キリシユネル作
トオマス・マン短編集 1 實吉捷郎譯
トオマス・マン短編集 2 實吉捷郎譯
祖妣 グリルバルツエル作
岡本修助譯

みれん シユニツツラ作
アナトール 小宮豊隆譯
青い鳥 若月紫蘭譯
ポリウクト 木村太郎譯
人間嫌ひ 關口存男譯
マノン・レススコア アベ・フレツォ作
従兄ポンス 上卷 水野 亮 譯
従兄ポンス 下卷 水野 亮 譯
知られざる傑作 (他五篇) 水野 亮 譯
カルメン 杉 捷 夫 譯
コロロンバ 杉 捷 夫 譯
エトルリアの壺 (外五篇) 杉 捷 夫 譯
ノアの方舟 前川堅市著
日の出前 橋本忠夫譯
希臘の春 城田皓一譯
ソアーナの異教徒 奥津彦重譯
水の異教徒 奥津彦重譯
水の上 吉江隆松譯

ピエルとジャン	モウパッサン作 前田 晃譯	★
生の誘惑(原名イヴ)	モウパッサン作 前田 晃譯	★
モウパッサン短篇集	前田 晃譯	★
菊 さ ん	ピエル・ロチ作 野上豊一郎譯	★
水島の漁夫	ピエル・ロチ作 吉江喬松譯	★
若き日の手紙	外山樞夫作 フイリツフ作	★
風車小屋だより	ドイデI著 櫻田 佐譯	★
愛と死との戯れ	ロマン・ロラン作 片山敏彦譯	★
獅子座の流星群	ロマン・ロラン作 片山敏彦譯	★
法王廳の抜穴	アンドレ・ジイド作 石川 淳譯	★
田園交響樂	アンドレ・ジイド作 石川 淳譯	★
クオレ	愛の上巻 アミーチス著 前田 晃譯	★
クオレ	愛の下巻 アミーチス著 前田 晃譯	★
恐ろしき媒	ホセ・エチエガライ作 永田寛定譯	★
作り上げた利害	ベト寛定譯	★
子 守 唄	永田寛定譯	★
希臘羅馬神話	バルフィンチ作 野上彌生子譯	★
フオースタス博士	マリー・ロウ作 松尾 相譯	★
パインズ詩集	中村爲治譯	★
エヴァンジェリン	ロングフェロウ作 齋藤悦子譯	★
クリスマス・カロール	デイックケンス作 森田草平譯	★
ブラウ	サウル 齋藤 勇譯	★
ラム沙翁物語	野上彌生子譯	★
ブレイク抒情詩抄	露岳文章譯	★
イノック・アーデン	テニスン作 入江直祐譯	★
小 公 子	パアネット著 若松暎子譯	★
聖女デューン	野上豊一郎譯	★
人と超 人	市川又彦譯	★
鰥 夫 の 家	市川又彦譯	★
思想の達し得る限り	相良徳三譯	★
俳 文	佐藤 清譯	★
ハレデイ短篇集	森村豊譯	★
幻想を追ふ女(他六篇)	森村豊譯	★
ユリシイズ(一)	チエムズチヨイス著 森田・名原他四名譯	★
ユリシイズ(二)	チエムズチヨイス著 森田・名原他四名譯	★
ユリシイズ(三)	チエムズチヨイス著 森田・名原他四名譯	★
ユリシイズ(四)	チエムズチヨイス著 森田・名原他四名譯	★
哲学・自然科学・文学・宗教・教育		
ブラスクラテスの辯明	久保 勉譯	★
トナク	リト ン阿部次郎譯	★
トナプロタゴラス	菊池豊一郎譯	★
カン	純粋理性批判上巻 天野貞祐譯	★
カン	実践理性批判 波多野精一譯	★
カン	プロレゴメナ 宮本和吉譯	★
カン	哲学體系 小尾範治譯	★
カン	知性改善論 島中尙志譯	★
カン	歴史と自然科学 道インデルバンド著 徳の原理に就て 聖徳田英雄譯	★
カン	認識の對象 山内得立譯	★
カン	七大哲 人 安倍能成譯	★
カン	人間機械論 ド・ラ・メトリエ著 杉 捷夫譯	★
カン	ヒューム人性論 太田善男譯	★

科学の價值	ポアンカレ著 田邊 元譯	★
科学と方法	ポアンカレ著 吉田洋一譯	★
科学者と詩人	ポアンカレ著 平林初之輔譯	★
将来の哲学の	フアイエルバウ著 植村晋六譯	★
根本命題	植村晋六譯	★
史的に見たる	アレニウス著 寺田寅彦譯	★
科学的宇宙觀の變遷	寺田寅彦譯	★
アルプスの氷河第一部	ジョン・チンダル著 矢島祐利譯	★
アルプスの氷河第二部	ジョン・チンダル著 矢島祐利譯	★
チンアルプスの旅より	矢島祐利譯	★
自然認識の限界につ	デユボアレ・モン著 坂田 徳男譯	★
いて・宇宙の七つの謎	坂田 徳男譯	★
自然に於ける美	ソロウイヨフ著 高村理智夫譯	★
藝術の一般的意義	久保 勉譯	★
ケーベル博士隨筆集	久保 勉編	★
カントとゲエテ	ジムメル著 谷川徹三譯	★
フアーブル昆虫記	林 達夫譯 山田吉彦譯	★
既刊 定價各★		
第二分冊・第九分冊・第十分冊		
第十二分冊・第十三分冊・第十四分冊		
第十七分冊・第十八分冊		
チャールズ・	D・グーウキン著 小泉 丹譯	★
ダーウキン	D・グーウキン著 小泉 丹譯	★
種の起原 上巻	ダーウキン著 小泉 丹譯	★
人及び動物の	ダーウキン著 小泉 丹譯	★
表情について	ダーウキン著 小泉 丹譯	★
雑種植物の研究	小泉 丹譯	★
生命の不可思議 上巻	後藤格次著	★
生命の不可思議 下巻	後藤格次著	★
回想のセザンヌ	有島生馬譯	★
この人を見よ	安倍能成譯	★
ミル 自 傳	西本正美譯	★
佛蘭西文學史	序ブリュンネル著 關根秀雄譯	★
伊太利文藝復興期の	ブルックハルト著 上巻 村松恒一郎譯	★
文化	上巻 村松恒一郎譯	★
ペーター論集	田部重治譯	★
ラフカディオ東西文學評論	十一谷義三郎著 オ・ヘルン著 三澤三郎譯	★
文學史の方法	瀬沼茂樹著	★
人間の精神	レムケ著 立花祐雄譯	★
戀 愛 論 上巻	スタンダル著 前川堅市譯	★
戀 愛 論 下巻	スタンダル著 前川堅市譯	★
戀愛と結婚 上巻	エリン・ケイ著 原田 實譯	★
戀愛と結婚 下巻	エリン・ケイ著 原田 實譯	★
懺悔 録 上巻	石川 巖著	★
懺悔 録 中巻	石川 巖著	★
懺悔 録 下巻	石川 巖著	★
人生 論	トル・ストイ著 中村白華譯	★
獨逸國民に告ぐ	大津 康譯	★
戀愛と結婚 下巻	エリン・ケイ著 原田 實譯	★
イ エ ス	林 達 夫譯	★
イミターシヨ・クリス	内村達三郎譯	★
チエムズチヨイス著	内村達三郎譯	★
アウグスチン	山内得立譯	★
唯一者とその所有	上スチルネル著 草間平作譯	★
唯一者とその所有	下スチルネル著 草間平作譯	★
エミイル(第一篇)	ルソウ著 平林初之輔譯	★
エミイル(第二篇)	ルソウ著 平林初之輔譯	★
エミイル(第三篇)	ルソウ著 平林初之輔譯	★
エミイル(第四篇)	ルソウ著 平林初之輔譯	★
エミイル(第五篇)	ルソウ著 平林初之輔譯	★

内村鑑三隨筆集 内村鑑三著 ★★
 文明論之概略 藤澤謙吉著 ★★
 論畫 四種 坂崎垣編 ★★

法律・社會・政治・經濟

テリストアテナイ原 隨園譯 ★★
 法の精神 上卷 モンテスキュー著 ★★
 法の精神 下卷 宮澤俊義譯 ★★
 法の精神 下卷 宮澤俊義譯 ★★
 権利のための闘争 イーリング著 ★★
 民約論 平林初之輔譯 ★★
 國富論 上卷 氣賀勘重譯 ★★
 フラツ労働者綱領 小泉信三譯註 ★★
 マル哲学の貧困 木下半治譯 ★★
 資本論初版鈔 長谷部文雄譯 ★★
 マル猶太人問題を論ず 久留間敏造譯 ★★
 エング自然辯證法上巻 加藤正二譯 ★★
 エング自然辯證法下巻 加藤正二譯 ★★
 エング自然辯證法下巻 加古祐二郎譯 ★★
 住宅問題 加田哲二譯 ★★

御註文に就て

□此の文庫は、普及を第一義として刊行する廉價版です。
 □内容の厳選 古今東西のあらゆる古典及び、價值高き良書を網羅し、校訂、翻譯に於ても最善を期します。
 □最低の廉價 出来る丈安く手に入られる様に、小さい形の中に、澤山の内容を含める形式を採りました。
 □購求の自由 しかも讀者が全く自由に欲しい本を随時求められる自由選擇の方法を採りました。
 □印刷の鮮明、校正の正確、製本の堅牢等の實際的方面に於ても亦最善を期します。
 □體裁は菊半裁判、紙裝、平福百穂畫伯裝幀。
 □活字は八ポイントを用ひました。
 □約百頁を單位として星一つでそれを現はし、★一つ毎に二十錢の定價です。
 □★一つを1に算へて此の文庫の番號を進めてゆきます。
 □番號はただ發行順に従つて之を追ふものであります。

カウツキー 基督教の成立 喜多野清一譯 ★★
 國家の起 源 西 雅 雄 譯 ★★
 フォイエルバッハ論 エングルス著 ★★
 反デューリング論 佐野文夫譯 ★★
 反デューリング論 上 長谷部文雄譯 ★★
 反デューリング論 下 長谷部文雄譯 ★★
 エング空想より科學へ 淺野 昇 譯 ★★
 マルクス・エンゲルス傳 長谷部文雄譯 ★★
 センブルグ經濟學入門 佐野文夫譯 ★★
 ローズブルグの手續 松井圭子譯 ★★
 マルクス・ドイッチェ・リヤザノフ編 ★★
 エンゲルス・ドイッチェ・リヤザノフ編 ★★
 帝國主義 長谷部文雄譯 ★★
 唯物論と經驗批 上 佐野文夫譯 ★★
 唯物論と經驗批 中 佐野文夫譯 ★★
 唯物論と經驗批 下 佐野文夫譯 ★★
 ニン何を爲すべきか 平田良衛譯 ★★
 戦争論 上巻 クラウゼヴィッツ著 ★★
 戦争論 下巻 クラウゼヴィッツ著 ★★
 戦争論 下巻 馬込健之助譯 ★★

□★★或は★★★は、それぞれ二百頁或は三百頁の本一冊なることを示し、百頁づつの分冊ではありません。
 □定價(及び送料)は左表の通りです。
 ★★ 定價二十錢 送料二錢
 ★★★ 四十錢 四錢
 ★★★ 六十錢 四錢
 ★★★ 八十錢 六錢
 ★★★★★ 一圓 六錢
 □御註文は前金で御願ひ致します。小さい本で極度の廉價なものですから必ず送料はお添へ下さい。切手代用は一割増に願ひます。

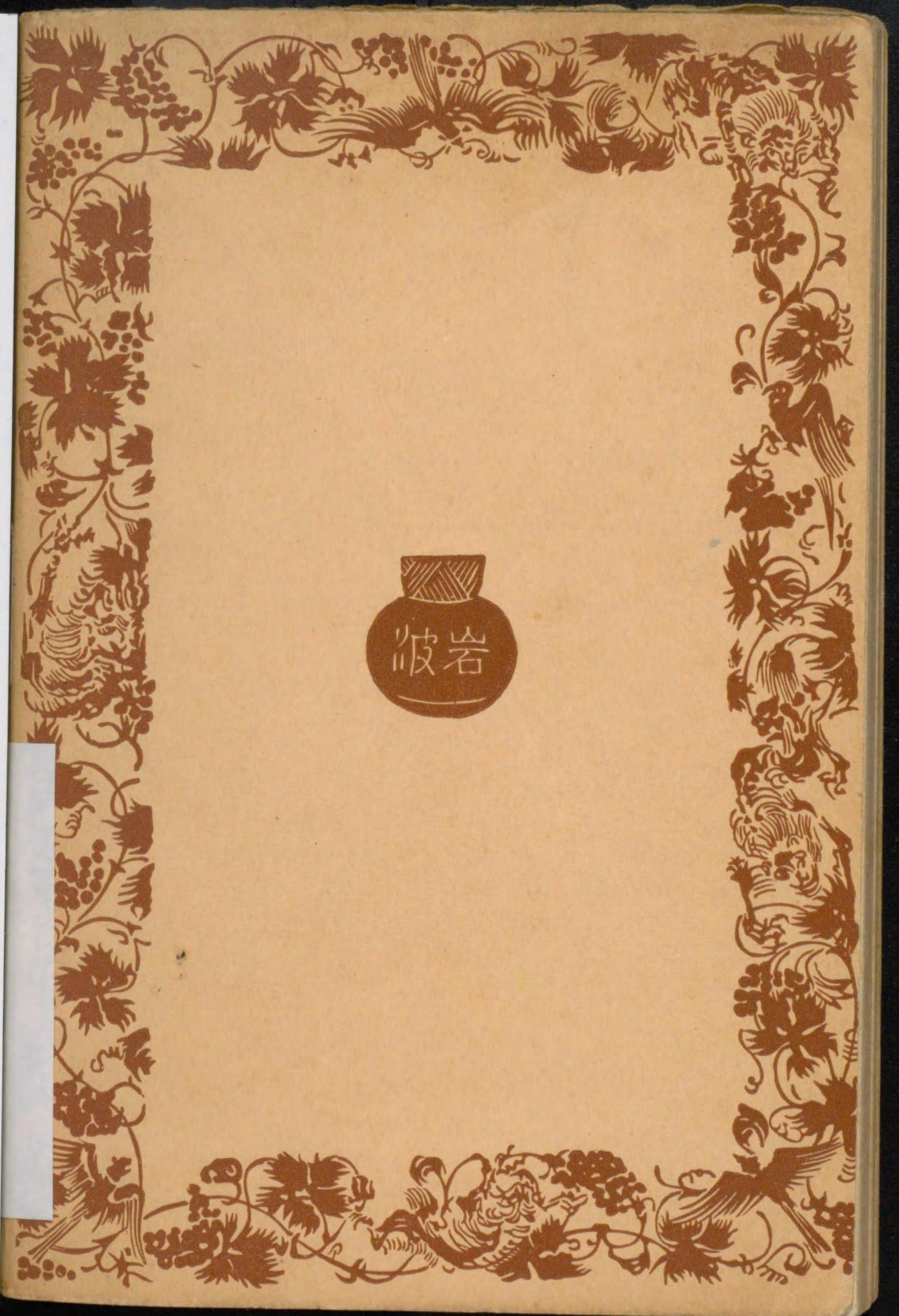
新刊書目

西朝	鶴櫻	諸陰	國比	事咄	和田萬吉校訂
人間	機械	論	論		下・ラ・メトリー著 杉捷夫譯
經濟的基礎	理財價值	論			ボエーム・パウエル著 長守善譯
ユリシイズ	(四)				森田・他五名譯

經濟學及課稅之原理 小泉信三譯 ★★
 經濟的財價值 小泉信三譯 ★★
 經濟的財價值 長守善譯 ★★
 道德的經濟的基礎 シュタウテンガール著 草間平作譯 ★★
 建築の七燈 高橋松川譯 ★★
 この後の者にも 西本正美譯 ★★
 地代論 山口正吾譯 ★★
 ベル婦人論 上巻 草間平作譯 ★★
 ベル婦人論 下巻 草間平作譯 ★★
 近代民主政治 一 松山武譯 ★★
 近代民主政治 二 松山武譯 ★★
 近代民主政治 三 松山武譯 ★★
 近代民主政治 四 松山武譯 ★★
 近代民主政治 五 松山武譯 ★★
 ヨーロッパ社會學上より見た大西克禮譯 ★★
 ヨーロッパ社會學上より見た小方庸正譯 ★★
 ヨーロッパ社會學上より見た小方庸正譯 ★★
 ヨーロッパ社會學上より見た小方庸正譯 ★★
 經濟要錄 佐藤信淵著 ★★

ヒューム人性論	太田善男譯	★★★
訓日本書紀(下卷)	黑板勝美編	★★★
朝鮮童謡選	金素雲譯編	★★★
戰爭論(上卷)	クラウゼヴィッツ著 馬込健之助譯	★★★
戰爭論(下卷)	クラウゼヴィッツ著 馬込健之助譯	★★★
頸飾 他七篇	前田 晁譯	★★
エミール 第五篇	ルソオ著 平林初之輔譯	★★
ローザ・ルクセンブルグ經濟學入門	佐野文夫譯	★★★
最新刊書目		
洒落本集	高木好次校訂	★★★
河童	芥川龍之介著	★★
イノック・アーデン	テニスン作 入江直祐譯	★★
註李太白詩選(下卷)	幸田露伴校閱 漆山又四郎譯註	★★★

初恋	ツルゲトネフ作 米川正夫譯	★★★
田園交響樂	アンドレ・ジイド作 川口篤譯	★★
自然と人生	徳富蘆花著	★★★
論語	武内義雄譯註	★★★
白秋詩抄	北原白秋著	★★★
陽氣なタルタラン (原名タルタラン・ド・タラスコン)	ド・テ作 小川泰一譯	★★
接吻・可愛い女(他二篇)	チエーホフ作 原久一郎譯	★★
近刊書目		
暴力論(上卷)	ソレル著 木下平治譯	★★
暴力論(下卷)	ソレル著 木下平治譯	★★
ダール 赤と黒(上卷)	桑原武夫譯 生島遼一譯	★★



波岩